

平成23年度協会フォーラム講演録

「シティズンシップ教育」

財団法人 明るい選挙推進協会

『未来への有権者教育（ポリティカルテラシーをどう育てていくか学校における模擬投票の実践）』

玉川学園中学社会・高等部公民科教諭 硯合 宗隆

『よい主権者になる学び——シティズンシップ教育の基礎と実践——』

シチズンシップ共育企画代表・ファシリテーター 川中 大輔

『シティズンシップと政治的リテラシー』

東京大学大学院教育学研究科教授 小玉 重夫

『参加するとはどういうことか？（哲学カフェ）』

鹿児島哲学カフェ 能瀬博之・鮫島志保

この講演録は、平成二三年度に実施した地域ボランティアフォーラム（連携型を含む）及び若者リーダーフォーラムでの講演のうち、シティズンシップ教育に関する講演等四本を収録したもので、一部要約しております。

目 次

- | | | |
|---|---|-----|
| 1 | 未来への有権者教育 | 5 |
| | ～ポリティカルリテラシーをどう育てていくか
学校における模擬投票の実践
硯合 宗隆 | |
| 2 | よい主権者になる学び | 35 |
| | ーシティズンシップ教育の基礎と実践ー
川中 大輔 | |
| 3 | シティズンシップと政治的リテラシー | 71 |
| | 小玉 重夫 | |
| 4 | 参加するとはどういうことか? | 109 |
| | (哲学カフェ)
能瀬 博之 鮫島 志保 | |

未来への有権者教育―ポリティカルリテラシーを どう育てていくか学校における模擬投票の実践

玉川学園中学社会・高等部公民科教諭 破合 宗隆

平成23年7月21日 於 愛知県安城市

皆様、こんにちは。ただいま御紹介ありがとうございました、東京の多摩西部のほうにありますが玉川学園というところで公民科の教員をしております破合（そあい）と申します。よろしくお願いいたします。

今日、私が皆様にお話しさせていただくことは、模擬選挙です。言葉を聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。普段、中学生、高校生と接しながら、現場で感じていること、それから本校でやっている模擬選挙というものの実践に関して、今日は具体的なイメージをぜひ持っていただきたい。決して、特別な取り組みではありませんので、ぜひ今日の機会がチャンスとなって、今後、安城市でも実践してい

れる学校が増えるといいなという期待を込めてお話しさせていただきたいと思っています。短い時間ですけれども、どうぞよろしくお願いします。

まず最初ですが、玉川学園とはどんな感じの学校かということを簡単に話しさせていただきます。

東京都の町田市という場所にあります。町田市は多摩西部にあります。私立の学校です。幼稚部から大学、大学院、それから脳科学研究所という研究所も含めて一つのキャンパスにある、全国でも比較的珍しい学校です。総人員は幼稚園生から教職員、生徒、児童、大学生まで全員含めて約1万人くらいの規模になります。

私が勤めているのは、その中の高学年と言っているのですが、5年前から、私たちの学校では小学校1年生から高校3年生まで順番に、中1と呼ばずに7年生、8年生、9年生、高校1年生を10年生、11年生、12年生という形で呼びまして、それを633ではなく4学年ずつに分けているのです。4学年ずつに分けて、校舎を分けたものから、私がいるのはちょうど中3から高3までがいる高学年です。かれこれ16年ほどやっておりますので、中学生、高校生のお話が中心になるかと思えますけれども、

小学校6年生も模擬選挙をやる時間がありましたので、その時のお話もさせていただきますければと思っています。

今日、お話しさせていただくのは、六つのテーマがあります。一つ目が、今、なぜ模擬選挙が必要なのか。二つ目が、カリキュラム内での位置付け。三つ目、授業の進め方と様子。そして四つ目、模擬選挙の意義。なぜそんなことをやるのかということがあると思いますので、未成年のポリティカルリテラシーという、政治的な教養、視点。そして五番目が市民教育。最近はシティズンシップ教育というような言葉で表されることも多いのですが、それとの関連。最後の六番目に、2008年10月に、私を含めて模擬選挙推進ネットワークのメンバーや学校の先生などとアメリカの大統領選挙の時に、ニューヨーク、ワシントン近郊の小学校を訪問させていただく機会がありました。そこで、本場アメリカの模擬選挙はどうなっているのかというようなことで、視察の時の写真などもご紹介させていただければと思います。

それでは、今、なぜ模擬選挙が必要なのかということですが、「先生、政経って覚えればいいんでしょう？」ということです。この言葉、私、よく生徒に投げかけられ

ます。私の専攻は政治経済、現代社会あたりが中心科目なのですけれども、ちょうど私の学校は、今日が期末試験の3日目、最終日でした。ちょうど先週、同じ言葉を中3の子から投げ掛けられたところです。「先生、政経って覚えればいいんでしょう?」。これは私自身にとっては非常に挑戦的な言葉として受け止めております。確かに、社会は覚えることが多いです。歴史に始まり年号「1192つくろろ鎌倉幕府」から、ちょうど今期の中3の範囲は政治でしたので、選挙制度、内閣、裁判所の仕組みや国会の仕組みなどを試験に出すわけです。そうすると、どうしても生徒は「先生、これさ、覚えときゃいいんだよね」と言う。これは確かに、私はその質問をされれば、確かに覚えなさい、覚えることは必要だと言いますが、その一方で、もう一人の私が違う言葉をささやきます。それだけではないんじゃないの?特に選挙というのは、やはり投票率。やはり何やかんや言っても、最終的には選挙がある時に1票入れに行ってもらわないと、民主主義が死んでしまうわけです。ところが、残念ながら私たち社会を教える教員はどうしても、そういうことは授業で言うのですけれども、実感を持って生徒にはそれを伝えきれないところがあります。つまり、衆議院、参議院の定数を

覚え、被選挙権の年齢を覚えさせます。でもだからと言って、彼らが20歳になった時に投票に行くとは限らないのです。そういう試験で100点を取れる子が、5年後にいい有権者としてちゃんと候補者を判断して1票を入れるようになるかというと、実はそういう保証もない。知識を覚えていないよりは覚えていたほうがいいのかもかもしれません。しかしながら、そういうことと、いい有権者として1票を入れるということは別の要素があるのではないでしょうか。

残念ながら、学校での政治に関する教育というのは、政治的な中立性というものにどうしても縛られますので、なかなか、特に公立の学校などではその一歩が踏み出せない。どうしても表面的なところをなぞって終わってしまうというのが現状のところ です。これだけ聞いたのでは、なかなか本当に若い人たちに選挙は大事なんだとか、投票に行かないと民主主義は死んでしまうという実感が出てこない。

事実、どのような状況があるかというと、極めて低い20代の投票率。約35%という現状が出ているわけです。先ほど、安城市の投票分布表を拝見いたしました が、同様の状況だと思いました。私が勤めている町田市に関しても同様の状況です。やはり20

代は30%です。年齢が上がっていくとどんどん上がっていきます。これは教育においては、非常に重要な課題ではないかと考えているわけです。

では、具体的にどうすればいいのかというところで、実は模擬選挙というのが一つのキーワードになるのではないかと考えて、本校では2003年の衆議院選で最初に導入して、その後、いちばん最近やったものに関しては、この間の4月に東京都知事選挙があり、そこまでやりました。合計9回ほど学校の中で、カリキュラムの中に位置付けて導入させていただいているというのが現状です。

本校での取り組みに関してですが、先ほど申し上げたとおり、全部で9回を2003年から実施させていただいております。

うちの学校は私学ということなので、東京都にありながらもそのうち半数は神奈川県民なもので、なかなか市議選というか、横浜市議選もそうですし、県知事選もそうですけれども、ちよつと情報量が不足する傾向があるものですから、国政選挙、首長選を中心にやっております。

本校での特徴としては、授業の中で選挙がある年にはカリキュラムで位置付ける。

つまり授業の一環としてやっているということです。芝浦工業大学柏中学高等学校では生徒会主体でやっておりませんが、私たちは授業でやりながら、また生徒会でもありますけれども、主には授業の中で位置付けております。

もう一つの特徴としては、模擬選挙推進ネットワークという団体と、町田市選挙管理委員会、そして町田青年会議所、市長選挙の時は、町田青年会議所が全面協力してくださっています。

具体的な授業のやり方ですが、だいたい準備5点セットという形でやっております。いろいろな模擬選挙のやり方はあるのですが、私はなるべく現実に近い形でやりたいと考えておりまして、各政党の国政選挙ですからマニフェスト、ポスターを模擬選挙推進ネットワークから提供してもらっています。やはり各政党のポスターをはり、そしてグループワークでやっていくのですが、マニフェスト、それから選挙広報などを配っているのですけれども、圧倒的に生徒の食いつきが違います。

なかなかすべてのマニフェストが手に入らないこともありますので、わかりやすいのは、新聞記事、各政党の主張を載せた新聞記事などが一番使えたりします。投票

用紙は、本物の投票用紙に近い形で、縦に折る形のデザインで作ります。そして投票箱、記載台、こちらは町田市選挙管理委員会の全面協力の下、快く貸していただいています。

授業はだいたい1時間から2時間です。1時間くらいでは、中学校3年生ではなかなかマニフェスト、新聞記事を読み込んで、そして投票するというのは難しいものですから、まず1時間目は模擬選挙をなぜ行うかというような意義の説明を行い、次にグループワークをします。グループワークは各グループに選挙資料を渡して、とにかく疑問点を出しなさい、「なぜ」を出しなさいという形で生徒に指示をします。そしてポイントは、批判的な「なぜ」。例えば、選挙のポスターを並べて見た時に、なぜこの政党はこの色なのか。この色から受ける僕たちのイメージは何か。だいたい党首がポスターになります。党首の視線の位置。遠くを見ているバージョンもありますし、真正面を見ているバージョンもあります。それによって受ける印象の違いは何かということに始まり、各マニフェストの主張は何なのかというようなことも含めて、「なぜ」をたくさん出させるようにします。

2時間目のところで、各グループからの疑問点などを集約して、最終的に意思決定をさせます。そして実際に1票を入れるという作業をさせるわけです。高校生くらいですと、50分間、1時間でこの1から最後までやることは可能です。小学生、中学生くらいですと、2時間あったほうがより深い授業ができるかなということです。

これは2010年の、小学校6年生を対象に行った町田市長選挙の模擬選挙の様子です。最初に話をして、その後グループワークをさせます。見て、おわかりになったと思いますが、教室のホワイトボードに、実際の各候補者のポスターをはります。また、本物の記載台と記載台にはる候補者一覧を、管からお借りしました。そして各報告書は鉛筆書きとし、本物の投票箱に投票させるといふわけです。

実は小学生くらいですと、これは本物の投票箱かと信用しない子がいます。「嘘だ、先生」



とか言って、ちょっと私としては心外なのですが、きつとそれは彼らが20歳になった時に、あの時は本物だった、先生が言ってたことは嘘じゃなかったんだということがわかると、期待をしています。非常に食いつきがいいです。

小学校6年生にも感想を書いてもらったんですが、小学生でありながら、町田市の財源の心配をしています。そう考えると、たいして大人が考えている視点と変わらない。実はそこが、一つ私もこの模擬選挙の展開の大きな発見ではありました。

これが中3です。2010年の参議院選です。この時はポートマッチという、読売新聞社と毎日新聞社のインターネット上のサイトに用意されている質問項目に対して賛成とか反対とか、クリックをどんどんしていくと、あなたの意見に近いのは何々党ですというのがパーセンテージで出てくるのです。Voteというのは「投票する」「Matchは「合わせる」という意味ですが、そういうシステムを開発して、



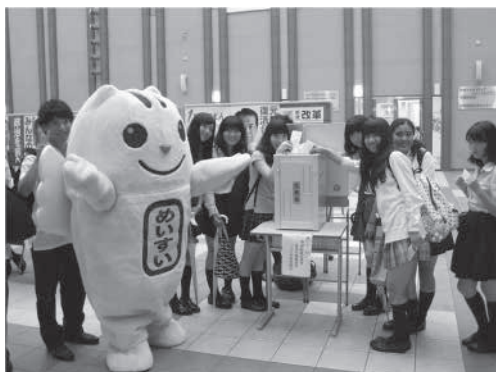
模擬選挙で使ってくれという打診がありまして、やらせてみました。その結果、インターネッ
トで質問項目をずっと、多少私が解説を入れながら、やってい
って投票させるという形を取り
ました。

こちら（写真上）は高校1年
生の歴史の授業での形です。模
擬選挙というのは、いろいろな

やり方があります。先ほどのようにグループワークでやる形式もありますし、このよ
うに学校形式で一人1枚、選挙候補を配ってやり、そして考えなさいという形もあり
です。何か特別なことがあるということではありません。

校内に設置された校内投票所です（写真下）。二重投票を防ぐために、教師が選管





の役目をして、名簿を全部チェックして、名簿をチェックしたら1枚渡すという形を取ります。こちらも同じく投票です。選挙立会人というような感じで、なるべく本物に近い雰囲気を出したいと思っています（写真上）。開票は中央委員会、いわゆる学

級委員会にやらせています。生徒は喜びます。時間がない時もありまして、特に今年の4月の統一地方選、私たちは東京都知事選挙があったのですけれども、始業日の2日後くらいだったのです。まだ授業が始まる前で、ちょっとできるかどうか危



緒にやりました。

これは先日の東京都知事選挙です。これは全部生徒が運営しています。呼びかけをしながら、めいすいくんがちよっと目を引きながら。最終的には投票率は60%くらい

ぶまれたのですが、その時は公開投票しました。これは昨年の参議院選挙の公開投票です（前頁写真下）。めいすいくんが写っておりますが、めいすいくんってご存じですか。明るい選挙推進協会のマスコットキャラクターです。たまたま空いているということでお借りしました。中には生徒が入っています。生徒は喜んで入りました。途中、小学生の帰りの列と会いまして、先ほどのめいすいくんが珍しかったんですね。追いかけてまわしていました。そして、私達も投票するということで、ワッツと群がっているシーンです。高校生が小学生たちにこっちだというふうに教えてやって、一



いきました。授業は、この時はまったくできなかったのですが、投票だけはできました。この時は、町田市明推協の皆様がいらっしやいました。町田市も決して模擬選挙が広がっているわけではなくて、一つの参考事例としてぜひ見学をしたいということで、20名くらい見ていただきました。また、総務省の選挙管理関係の方も視察にいらっしやいました。

ここまできると、なるべく本物に近い形でやりたいということが伝わったかなと思うのですが、実際にやるにあたっての注意事項、どんなことをやっているかということをご紹介させていただきます。

当たり前ですけれども、生徒には投票行為そのものは成績には関係ないと説明しています。それから白票投票もOKと説明をしています。決して望ましい形ではないと思いますが、棄権するよりはましかなと。生徒たちに、もし、どの候補者も信用できない、

どの政党も胡散臭いというようなことがあれば、棄権するのではなくて白票を入れに行きなさい、そうすれば投票率は下がりません。下がりませんし、一つの意思表示ということになりますので、これも合計としますという指示を出します。ただし、セカンドベストというか、2番目に近いところをそういう時には選ぶのが望ましいという説明は当然いたします。

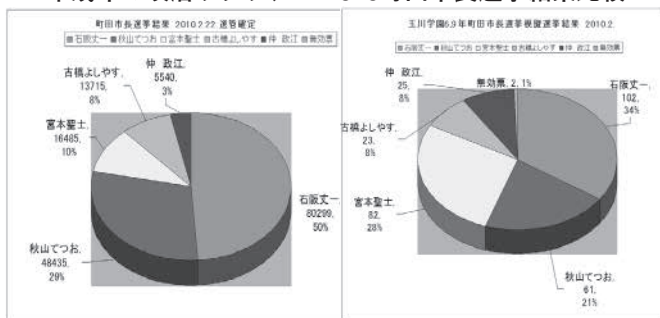
大事な点ですが、新聞やテレビを通して自分をもっともよいと思った政党を選ぶこと。授業でやっておりますので、過程やプロセスが大事であるということは強調します。自分の意思で決めるということです。生徒は笑って聞きますけれども、買収や脅迫など、そういうことをしてはいけません。何々党に入れたらジュース買ってやるからとか、そういうことをやってはだめだということや、何々党に入れたら口きかないとか、そういうことはだめだという話はします。これは一般の公職選挙法でも禁止されている事項を説明していることになりますので、同じことかなと思います。

こちらもある点かと思いますが、開票結果は本選挙の後に公表するという約束をしています。これは人気投票の禁止という法律事項に抵触してしまうかもしれない。

実際に、日曜日の８時に投票は締め切られるわけですが、その前に開票すると、それをどこかのメディアが報道して、投票誘導になってしまっているのではないかと指摘されることもあるのです。ですので、模擬選挙の結果に関しては、必ず８時以降に実際の選挙結果が出た後に公表するという形をとっております。

具体的に結果がどうなのかというところです。未成年の政治リテラシー、ちょっと結果を考察したいと思います。これは小学校６年生と中学校３年生の内訳です。２０１０年の町田市長選挙です。この時は石坂さんという人が実際の選挙では約半数の票を取って当選したのですけれども、模擬選挙の結果はどうだったかというと、小学校６年生、中学校３年生、同じく石坂候補に入れております。得票マニュアルが違うのです

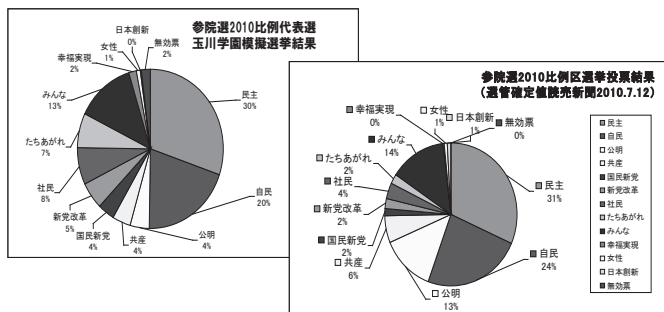
未成年の政治リテラシー 2010町田市長選挙結果比較



けれども、当選者という点では同じであるという結果でした。

次、2010年の参議院選挙の結果です。図中左側が玉川学園での模擬投票の結果です。薄く水色のいちばん得票率があるのが民主党でした。この時、玉川学園では約30%の得票率、そして2番目の濃い紫が自民党で20%、公明党、国民新党という感じでつながっていきます。実際の選挙の結果はどうかというと、ほぼ一緒なのです。こちらは読売新聞に載った選挙の確定投票数をグラフに落とし込んだものです。民主党が全体の得票数の31%、つまり校内での得票率と1%しか差がなかったのです。校内の投票では30%、実際の得票率も民主党31%。同じく自民党と校内では20%の得票率で、実際は24%ということで、以下、ほとんど変

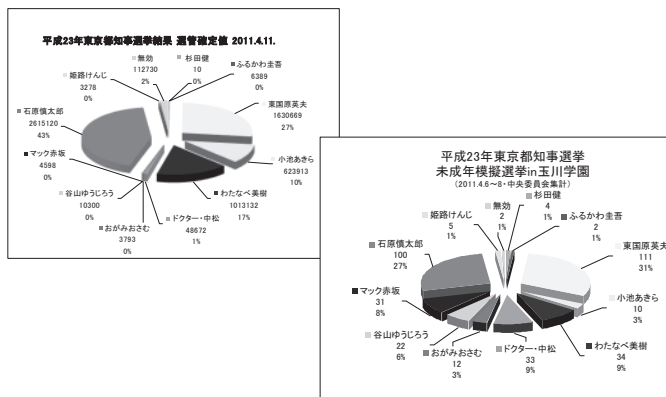
未成年の政治リテラシー 2010参院選結果比較



わらないという結果です。これは、この二つの選挙に限らずほとんどの選挙の結果は、模擬選挙の結果とほぼ一緒です。

こちらは東京都知事選挙です。この間の4月のものです。東京都知事選挙は大変でした。非常に候補者数が多くて、10人以上出ていたのですけれども、こちらは選管確定で、石原慎太郎都知事が全体の得票率の43%、模擬選挙の結果も同じ感じになりました。実際の模擬選挙の石原都知事の得票率は27%です。東国原知事は若者に人気があつて、実は事前のメディアの調査でも20代30代での第1位は東国原知事だったのです。そういった意味では、ほぼ同じ傾向を示しています。この三つの結果から言えることは

未成年の政治リテラシー 2011東京都知事選選挙結果比較



未成年、中学生や高校生も大人とほぼ同じ判断で投票しているということが言えると思います。

参加後の感想では、投票の重要性や選挙の意義は十分感じていますし、それからメディアリテラシー、メディアを批判的に見るということも強調します。私は個人的にはメディアに非常に批判的な目を持つている一人ですが、とかくメディアは、おもしろおかしく報道したりすることも多いですし、偏ったりということもあります。

なかなか生徒がそこまで見るのは難しいこともあるのですが、たぶん少なくとも、どういう戦略でその政党が来ているかとか、この党はこういう印象を与えたりという部分は気づけるように、もしくはこの政党とか、この候補者はいいことしか言っていないと、実は選挙広告に載せると、生徒は「先生、これ皆いいことしか言っていないじゃん」と言うのです。そういうことを言うと、お前は素晴らしいということ褒めてあげるのですけれども、実はそこに気づけるかどうか。小学校6年生で、もう財源の心配をするというのは、実はそういう目を持っている子がいるということです。

実際に模擬選挙をやって、投票率に果たして貢献するのかという議論があります。

残念ながらこれは追跡調査のデータはないのですが、2005年の衆議院選挙、小泉郵政解散の選挙の時に投票した、模擬投票を経験した子が昨年20歳になりました。そして、初の選挙に行ったわけです。卒業生に聞いてみました。「5年前の模擬選挙のこと覚えてる?」「覚えています」「今回、初めての選挙に行つて、本物の選挙はどうだった?」「初めての選挙という感じはしませんでした」と言うのです。もちろん、私自身にしてもそれは嬉しいことだと思いますし、また、若者投票率が低いという一つの理由として、選挙というハードルが高い、つまり選挙のイメージを持たないで来てしまっているがために、何となく投票所に行きにくいという生徒たちに対しては、少なくとも模擬選挙を学生の時代でやっていれば、そのハードルは下がる。つまり選挙というイメージは持っていますので、別に特別なことではないのだということがわかる。でも、そういうイメージがないと、なかなか人間はイメージがないと、怖いものには触りませんよね。ですので、少なくとも模擬選挙を学校の中で繰り返しやっていくと、選挙というものに対するハードルは下がっていくのではないか。これは実際に、そこで模擬選挙を経験した生徒が、5年後に自分が有権者になった時に、本当は

初めての選挙なのだけれども、そうじゃないと思ったという点では、教育的な効果が認められたと言えるのではないかと思っています。

模擬選挙は、未成年であっても民主主義というものを一つ体感できると言えると思いますし、未来の賢い有権者になれる。実は子どもと表現してしまうと、何となく大人とは別のものという印象を与えてしまうのですが、やはり大人である私たちが生徒たちを見る時に、特に有権者教育という観点で見ると、子どもじゃなくて未来の有権者なのだという視点が大事なのではないかという気がします。そして、若者の投票率アップに貢献できるのではないかと、私自身は思っています。

最近では市民教育ということがよく言われておりますが、これと模擬選挙の関係です。市民教育といういろいろな考え方がありますが、大きく四つの要素が必要だと考えられています。「社会的責任と道徳的責任」、それから「能動的シテイズンシップ」。「コミュニティとのつながり」、そして「政治リテラシー」政治的な教養のことですね。そして、これらに「アイデンティティと多様性」というのを加えた五つの観点、模擬選挙ではこの五つの観点すべて入れることができると思います。

例えば、グループワークをやると、お互い意見が違うのは当たり前です。ですからグループで一つの政党を選びなさいとか、グループで一つの候補者にしなさいというのは絶対にしません。ただ、自分たちでよりよい意見交換をしなさいとだけ言います。そうすればお互いに違う意見を持っているということは十分に理解できます。エコロジーというのは、基本的には相互関係性という意味で、お互いがお互いの意見に違いを持っているということを実感できる。そして、その違うということ——「多様性の美」と私は申し上げていきますけれども、これが当たり前である。違うから排除するのではなくて、違うからいいのだと。民主主義はそうでないと困ります。そうでないと一党独裁になってしまいますので、やはり違いがあるということを認識する必要がありますと、少なくとも私自身は考えております。

最後になりますけれども、アメリカ大統領選挙の時の話を紹介させていただきますと思います。2008年10月の最終週から1週間ほどかけて、模擬選挙推進ネットワークの林さんと、私と、芝浦工大柏の杉浦先生という先生の3人で、全部で7校ほどの学校を回ってまいりました。

アメリカの大統領選挙の時は、必ず模擬投票が行われます。公立、私学問わず、ほぼ、すべての学校で行われているわけです。そしてその主体はどこがやっているかという、大きな団体が二つあります。一つがNSPME (National Student/Parent Mock Election)、Mock Election というのは模擬選挙という意味です。そういう全米規模の団体。もう一つは Kids Voting USA という、二つの団体があります。私たちは前者の NSPME というところの紹介で、いくつか学校を紹介してもらって行きました。

アメリカの学校というのは規模が大から小までいろいろです。最初に行った学校は超マンモス校でした。どれくらいマンモスかというと、1学年の数が約1000人いるところでした。超マンモスですので、紙で投票などやっつけられないです。社会の先生が30人いるとかそういう世界でしたので、どうしているかというと、NSPME という団体がオンライン投票を実施しています。生徒はコンピュータ室に来て、その当時のオバマとマケインの、二人の候補が対立していたのですが、クリックしてどちらかに入れたり、それからこのウェブ上には、「もし以下の方で今あなたが大統領に選ばれるとしたら誰ですか?」といった質問もあり、リンカーンとかそういう人が並んで

いたりして、非常に面白くてきているのです。そういう形のオンライン投票が主流ではありました。こういう形で、一つイベントとして学校で楽しむ。

これは、小学校でした。見た中でいちばん小さな投票者です。たぶん小学校1年生くらい、私の腰くらいの高さしかない子たちが先生たちに連れられて、ズラズラと行きまして、食堂が投票所になっていたのです。そして、背伸びをしながら書いて、1票を入れる。最初、私はあまり小さい子には意味がないのではないかと思っていたの



です。誰かの言いなりかもしれないし、そんな政治的なりテラシーなどないだろうと考えていたのですが、実はアメリカではおかまいなしです。投票が終わるとクラスごとに先生が生徒を集めて、どうだった？ とか、アメリカはオープンですので、誰に投票した？ とか聞くと、圧倒的にオバマ人気でした。圧倒的でした。誰に投票した？ と言うと、ワーツと皆が手を挙げるような感じでした。そしていろいろな感想を聞いたりなどということをして、非常に先生と生徒も楽しんでいました。普



通のこととしてとらえていると、非常に強い印象を持ちました。

これはもう少し大きいです。ワシントン近郊の中学校でした。体育館もこんな感じで飾り付けて、生徒会が全部主体でやっていました（写真上）。こちらでもオンライン投票だったのですけれども、その日は模擬投票を一人に決めて、学級委員会たちが全部仕切る形でした。

こちらは、ニューヨーク近郊の小学校です（写真下）。小学校ですけれども、それぞれの主張の主な点をまとめて話をしたりしています。事前の準備をどれくらいするのですかと聞いたら、そんなに長くかけているわけではありません。1週間程度、授業の中で、調べ学習をさせたり発表させるということで、対応しているということでした。



こちらも小学校です。この時に模擬投票を司っていたのは、PTAでした。お母さんたちが投票所の管理をして、順番にクラスから抜け出てきて、名簿チェックをして、紙を渡してという感じでした。Vote for the next Presidentと書いてある呼びかけのポスターもあちこちにありました。学校によってオンライン投票しているところもありますし、親が全面的に取り組んでいる学校もありましたし、自分たちでやっているところもありました。非常にいろいろな方法だったのです。

日本ではよくいらつしやるのですが、親からのクレームはなぜかないのです。そんなに政治に近づけて危ないとかはないですかと聞いたたら、そんなことは1件もないと。同じ質問をすべての学校にやったのですけれども、そういうのは1件もないと。1件だけ電話があったと言っていました。それは、「今日、うちの子風邪ひいてどうしても学校休まないといけない。だから模擬投票できないのだけれども、後から追加で投票できないか」というような質問があったと。親も、こういうことは普通のこ

とだというふうに受け止めているというのが非常に強く印象に残っております。

決してアメリカ型の民主主義がベストであると言うつもりはありませんけれども、少なくとも民主主義であるとか、投票の意義ということに関しては、本当に小さな時から学校の中で自然と取り組まれていく。そういう雰囲気があるのだということが、非常に羨ましく思った記憶があります。

多少ですが、お祭り騒ぎ的な要素もあっていいかなと。私はその時に、それまではずいぶん、まじめにやらなければと構えていたところがあったのですが、このアメリカの現状を見て、着ぐるみのめいすいくんにも参加してもらおうようにしました。生徒が楽しんだ形で、そのプロセスを重視してもらえればと思ったからです。

ぜひ安城市の中でも、いろいろと実践を重ねていけるといいなという感じはしております。私立のほうが現在、模擬選挙は実践校が多いのが現実です。比較的小回りが利くという点であったり、校長や管理職の方々の理解も得やすいという現状もあります。

ただ、ご存じの方も多いと思いますが、昨年の夏の参議院選挙の時には、神奈川県

下の全高校で模擬選挙が実施されました。それは当時の松沢神奈川県知事の音頭によるものですが、シチズンシップ重点校という形で、いくつか指定した中で、形式は問わないからとにかく高校生に参議院選に1票入れさせなさいという形で実施した経緯があり、実施しました。非常に大きな1歩だと思って、私は嬉しく思っています。

公立の学校の先生方でも、実践されている先生はたくさんいるのです。いるのですけれども、皆さんなかなか声を大きくして言えない。この投票結果は模擬選挙推進ネットワークが集めて、全体の日本の未成年の模擬選挙の結果として公表しているのですけれども、匿名であったりなどもあります。

私の授業の中で特定の政党や候補者を推したりということは絶対にありませんし、何か色が付いているのではないかとという誤解も受けるのですが、そんなものはまったくありません。公立の小学校での実践例はまだないので、この安城市の小学校の先生が次回の選挙で実践されれば全国第1号になるかなと思いますが、そういう形でどこかの学校でもシティズンシップ教育の実践と私自身は考えておりますので、少しでも増えるといいなと思っています。

2年後に新しい学習指導要領がスタートします。職業柄、教科書会社の人と話すことも多いのですけれども、いくつか教科書会社は、模擬選挙を実践として記載するという報告を聞いております。まず教科書や資料集などで出てくると少しは市民権が得られるようになるのかなと思いますが、私学よりは公立で実践されたほうがはるかに効果は高いと私は考えております。トップダウンでもボトムアップでも、どちらでも構わないですけれども、1校でも多く参加できるように。

また、今日お集まりの皆さん、明るい選挙を推進するという役割をお持ちになっていらつしやると思いますので、こういう実践にぜひご理解をいただいて、何かあればぜひご支援、ご協力いただけると、未来の賢い有権者が育つのではないかと思っております。

私の話はここまでです。どうもありがとうございました。（拍手）

よい主権者になる学び

―シティズンシップ教育の基礎と実践―

シチズンシップ共育企画代表・ファシリテーター 川中 大輔

平成23年10月31日 於 滋賀県大津市

市民が「思い」をカタチにする支援

今日は「よい主権者になる学び」を演題にお話させていただきますが、最初に自己紹介させていただきます。

普段は、ファシリテーターとして仕事をしています。「促す」という意味の英語「facilitate」から来ており、例えば、会議や話し合いの場面で発言を促して、よりよい形での合意形成を実現したり、ワークショップで参加を促したり、参加型学習の場で学び合いを促すことになります。グループワークを活用した学習でも、進め方がよ

くなければ、参加者それぞれが個々の意見を発言して、それで終わりになってしまいます。そうではなく、個々の発言を受けて、お互いに感じたことや気づいたことを分かち合って、新しい気づきを見いだしていくためには、「いい進行」が求められます。この「いい進行」をするのが、ファシリテーターという仕事になります。

私はファシリテーターとして、シチズンシップ共育企画というNPOで活動をしています。シチズンシップという言葉をご存知でしょうか。明るい選挙推進協会が出されている『Voters』平成23年7月号の中では、公民的資質と訳されています。一般には、「市民性」と訳されることが多い言葉です。ここでの「市民」は、民主主義の担い手という意味ですが、その意識や態度、行動をシチズンシップと考えていただくのと分かりやすいでしょう。学術的には、多元的な意味がありますが、その説明については、今回は割愛させていただきます。

シチズンシップ共育企画では、多くの市民が社会を「自分のもの」として感じ、自分たちが社会を動かしていけると気づき、社会づくりに参加していくことを促したいという思いで、いくつかの教育活動に取り組んでいます。例えば、後で詳しく紹介い

たしますが、高校生対象のまちづくり学習プログラムを提供したり、市民活動団体対象にマネジメント研修プログラムなどを提供しています。

特に団体設立当初は、このマネジメント研修に力点を置いていました。それは、市民が自分たちの手でわがまちをよりよいものにしていくとしても、いい運営ができなければその思いは形にならないことを肌身で実感したからです。私は阪神・淡路大震災を契機として市民活動に踏み出したNPOを皮切りに複数の団体で活動してきましたが、グループ運営がうまくできないために思いが空回りしていたり、活動休止や解散に追い込まれた団体をいくつも見てきました。市民として社会づくりの担い手になるためには、思いだけは不十分なのです。微力な市民がネットワークし、グループを形成する中で大きな力を生み出していけるようリーダーシップを培う学びの場が必要になってきます。

しかし、そういった市民の活動は、一つひとつが非常に小さなものです。様々な方と一緒に仕事をする「協働」が、活動を展開していくためには求められますが、協働のコーディネートにも取り組んでいます。

東日本大震災の支援でも、震災復興計画の策定への市民参画ワークショップを、阪神・淡路大震災の復興で活躍された先輩方や現地団体と一緒に実施しています。私はその中で中高生のグループを担当したのですが、10年後どんな「まち」に住みたいのかを聴くと、非常に面白い答えが返ってきました。

大型スーパーがドーンと1個あり、地域の商店街がつぶれていく。そんなのは嫌だということです。歩いていけるような家の近くに色々なお店がたくさんある商店街が生き生きしているように、復興してほしいと。これはすごい意見ですね。こうした未来のまちの担い手の意見をきちんと行政に届くような形でまとめるとお手伝いをしました。

ここで出会った中高生は行政に提案するだけではなく、自分たちでも活動していきたいということだったので、これからの復興過程での活動を企画する話し合いの場づくりのサポーター等もしています。このように学校のみならず、地域の様々なところに、子どもの育ちの受け皿や居場所、活躍のフィールドがある成長環境づくりが進めばと思っています。

市民が社会を動かしていることの気づき

シチズンシップ共育企画は、2003年に設立しましたが、それまで私は青少年教育や環境問題、まちづくりなど、いろいろなグループに関わっていて、一つ気がついたのです。市民が社会を動かしていることに気がついたのです。この気づきを分かち合いたいということで、この団体の立ち上げに至りました。

皆さんからすれば、市民が社会を動かしているということは自明の理と思われるかもしれませんが。しかし、私が高校生や大学生の頃、社会は結局のところ、政治家や行政が動かしているのではないのか、市民が何を言っても無力なのではないかと常々思っていました。しかし、市民活動の先人の方々と出会い、お話を伺っていると、それが違うということを実感したのでした。例えば、自分も関わった事例では、商店街活性化でも行政にこうしてくれ、ああしてくれと要望するよりも、自分たちで企画を仕掛けて、行動する方が課題の解決は、はるかによりよい形で、しかも、早くに実現しました。商店街では普段買物をしないような若い人たちが集まり、その土地の店に気づき、「また来るね」と言って帰っていく関係が生まれていく。その風景を見た時に、

これだと思ったのでした。

そのように市民が自主的／自発的に動くためのサポートを行政が担うことも出てくるかもしれませんが、まずは市民自身が自分たちの手で社会を動かしていけるという気づきをどう広げていくのか、いま、私たちはこの問いに向き合う必要があるのではないでしょうか。

「よい主権者」「よい市民」とは？

今日は、「よい主権者になる学び」という演題を掲げました。では、「よい主権者」とは何なのでしょう、まずこれを皆さんと一緒に考えていきます。次は、「どのようにすればそのようなよい主権者は育つのか」を考えます。最後に、「私たちはどのような実践がこれから求められるのか」を考えます。先般、総務省が「常時啓発事業のあり方等研究会」の中間取りまとめを発表されました。この中でシティズンシップ教育の一翼を担う形での主権者教育を進め、常時啓発に取り組んいくことが肝要であるとされています。私の話は、直接みなさんの活動につながるわけではありませんが、

シティズンシップ教育への理解を深めることが、常時啓発の今後の発展の方向性を見定める参考になれば、幸いです。

さて、「市民」を育む学びがシティズンシップ教育と云われますが、「よい市民」や「よい主権者」とはどのような存在なのか、一体どのような行為や態度をする人なのか、皆さんのご意見を聞いてみましょう。

参加者 地域活動に参加する。物事を理解している。政治に関心を持っている。各種選挙に投票する。いろいろな場で自分の意見を述べる。自分の権利義務をよく理解している。他人を考え、他人の意見をよく聞く。自分を大切にする。相手を大切にする。状況を正しく把握する。相手の話を理解し、正しい判断をする。（拍手）

川中 かなり網羅的で。すごいと思いつながら聞いていました。ありがとうございます
参加者 自治会活動や市の行事などに参画される方、政治や選挙などに参加される方。そして、他の人の意見を尊重するということも挙げさせていただきました。（拍手）

川中 ありがとうございます。本当に言葉が豊かで、私が次に用意しているような話

を飛び越えられたように思いながらも伺いました。本当は他の方のご意見も聞きたいのですが、限られた時間なので、これくらいいたします。

みなさんの言葉にも見られましたように、常時啓発や主権者教育をするといった時に、私たちは決して投票することだけを目指しているわけではないのです。自分自身を大切にしたり、他の人のことを尊重したり、また、投票だけではなく、様々な地域の出来事や社会の課題を理解して、自分の考えをまとめたり、価値判断をして、意思決定を行ったり、それぞれの市民活動をする。そういう人を私たちは「よい市民」や「よい主権者」としてイメージしています。

主権者教育や常時啓発となると、すぐに「投票」となりますが、それだけでは本当はいけないのです。もっと幅広く考えたものを私たちはパッケージにして伝えていく必要があります。投票さえすればいいのかということを考える時に、私自身がハッと思った時があったのです。日本では毎年、約1万カ所で投票率がほぼ100%の選挙が行われています。中学校の生徒会長の選挙です。実質的には、投票が義務化されて

いるようなものですが、とても「よい主権者」になる学びを得ているのかと言えば、そうとは言い切れないのではないでしょうか。私の通っていた中学校でも、インパクト勝負のような選挙戦で、生徒会役員を選出することが、自分たちの学校生活とどう結びついていくのか、立候補者も投票者も分かっていなかったと思います。最近の選挙もまた、本当に腰の据えた政策論争があるかと言えば疑問に感じるものが少なくありません。

投票率について関心をもつことは当然ですが、投票率だけではなく「投票質」について考えなければいけないでしょう。投票の質を鍛えるためには何が必要なのでしょう。先程みなさんに仰っていただきましたが、社会問題の構造的／批判的な理解も必要でしょうし、そうした問題に対する自分の考えも明らかとしないといけないでしょう。自分は物事を判断する時に何を大切にするのかという自らの価値観に気づくこともまた求められます。また、他の人と議論することなくして、当然質は上がりませんが、他の人の意見を尊重するなど、議論の作法を知らなければいけません。投票行動をよりよいものにしていく上で、私たちは「選挙に行きましょう」というスローガ

ンを繰り返すだけで本当にいいのでしょうか。

また、投票の質を向上させて、投票したら終わりでもいいのかと言えば、そうではないでしょう。「よい主権者」は投票した後、自分たちが選んだ候補者がどのような役回りを果たし、どのような政策を実現しているのかをモニターすることが求められます。また、行政に要望するのみならず、自分たちでできる活動を創っていくことも大事でしょう。

このように考えますと、投票を義務化すればいいという議論にはならないでしょう。何より、自発性がない中での投票は、当然ですが考えられたものにはなりません。義務化された行為の特徴は、「言われたことはやるが、言われていないことはやらない」ということにあるからです。私たちは、そのような受け身な状態を生み出すのではなく、どのように主体性を育むのかを考えたいところです。若者がもつと投票に行かなければいけない。もつと地域で活動しなければいけない、地域に関心を持たなければいけない。それはそうかもしれませんが、それを無理にやらせても大きな意味はないように思われます。

人間交際空間としての社会への回路

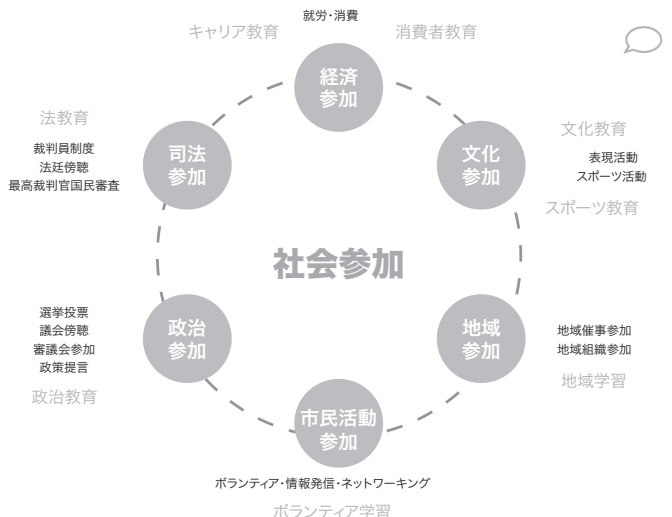
どのように自発性や主体性の発露を刺激すればいいのかを考える前に、市民が参加する「社会」とは何かについて理解を深めておきましょう。私が出講している大学の講義で学生に「社会」のイメージを聞いたら、「冷たい人間性のない経済の世界」や「厳しい労働環境の世界」といったイメージが強い。いわゆる「社会人」から連想されるものです。

しかし、本来「社会」という言葉の意味はそういうものではありません。「社会」という言葉は、明治期に入ってきたSocietyという英語に訳を当てて生まれたものです。福沢諭吉はSocietyを「人間交際」と訳したのですが、社会学辞典を見れば、Societyの本来の意味をうまく捉えています。人と人が出会い、交わり、結びつき、関係し合い、そして支え合う、この空間が「社会」なのです。つまり、社会参加するということは、私は様々な人々の結びつきの中で生きているのだという気づきを自覚し、よりよい結びつき方に、よりよい関係づくりに向けて動くということなのです。逆に言えば、社会問題という言葉は、人間交際のつながりの不具合故に立ち上がってくるも

のと言えます。

私も委員を務めている、京都市ユースサービス協会の企画委員会で、この社会参加を定義することを試みました。人と人とのつながりをよりよい形にしていくなかに、経済参加、文化参加、地域参加、市民活動参加、政治参加、司法参加といった、いくつもの結びつきの回路が私たちにあります。

経済参加には、消費と労働があります。いわゆる「社会人」になるとは、人と人とが仕事で支え合う空間に入っていくというものの一つです。例えば、何らかの学びを得たい、成長したいという人たちが



がいて、それに対して、学びを提供するという教員がいる。すると、その二者は結びつき、学びの場が立ち上がります。社会という空間がなければ、学びたい人も教えた人も、個々にそのように思っているだけで、結びつきません。しかし、この結びつきがいびつな形になってしまっているのではないかという問い掛けをいま、私たちは投げかけられています。

鶴見良行さんの『バナナと日本人』（岩波新書、1982年）などでも提起されていることですが、身近な例で言えば、100円ショップが挙げられます。100円ショップに行くと、これがなぜ100円で売ることができるのかと、私たちは不思議に思います。その背景には、中国での労働者の人権問題や環境問題があります。知らず知らずの内に、私たちは、買う行為を通じて問題を促進する側に回ってしまっていることになります。私たちが何かを買うということは、当たり前のことですが、ものを生産したり、流通・販売したりしている人たちと社会空間で取引をしていることです。消費者市民教育とは、本来自分の価値観に沿った判断をして、ものを買う、生産者と消費者が互恵的関係となるつながりをつくれるようにするために行われるものです。

市民は、いま例示した経済的位相だけではなく、様々な社会とつながる回路の中で、自らの行為と社会のつながりの不具合の關係に気づき、その直し方を考え、そして実際に動く人です。投票は政治参加の一行為ですが、それは社会のつながりの不具合を政策形成を始めとする政治システムの動きを通じて、このように解決してほしいという意思を伝え、その実現を託せる人を選出する営みと言えます。

シティズンシップ教育は、このように社会への様々なつながり方があるという道筋や幅を示した上で、どのようにその道を選ぶかを問いかけるものです。ここが重要なポイントで、全ての回路で市民的行動をパーフェクトに取り組む「完全な市民」や「完全な主権者」を目指すものではありません。経済や政治、市民活動や文化・スポーツ、様々な選択肢がある中で、個々人が自分でつながり方を考えて、選択をして、動いていくのです。この選択のためには、自分たちが社会を変えられるという気づきが必要でしょうし、また、思いを実現するための技法の習得も必要です。「よい投票」をしたいと思っても、政策を呼び込む力が必要になります。そういった気づきの獲得や技法の習得がシティズンシップ教育と言われているものです。

他者の痛みへの感性

しかし、これだけでシティズンシップ教育を十分に定義したと私は思えません。市民は他者の痛みに共感する存在でもあり、そうした感性の涵養も求められるのではないのでしょうか。東日本大震災が起きた後、私たちは「放っておけない」、何かできることないだろうか」と思われたことでしょう。自分に何か不具合があるわけではないですが、周りの不具合を放っておけない。この痛みを分かち合う気持ちがあるから、私たちは支え手に回ることが起こるのでしょうか。私と他者の命のつながりを自覚し、連帯していく。言葉にすれば簡単ですが、日常生活の中で他者の痛みに対して感じ入ることは非常に難しいことです。加藤哲夫さんは『市民のネットワーク』（本の森、2011年）で、私たちに問い掛けます。

「人は普段、他者を意識から排除し、理解可能な範囲で生活をしています。そのような環境で、真に他者で出会うのは難しいのです。人間は自分と似ているものに囲まれ、城壁をつくる生き物です。意図的に異質なものと出会うことを課しないと、主体は立ち上がらないし社会は変わりません。」

日々問題がないように感じて暮らしている人が、問題を持つている当事者と積極的につながりたいと思うことは珍しいことでしょう。例えば、ホームレスの方々が道で倒れておられても、多くの方は色々な気持ちを抱くにしても、素通りする人が少なくありません。東日本大震災の時に何か支援をしたいと思った人々も、あの時に湧き起こった気持ちがホームレスの方々には向かないことが多いようです。正直に申しあげれば、私もわずかな支援活動以外は十分にできていません。毎日、道で出会う多くのホームレスの方々に「大丈夫ですか」と声をかけているわけではありません。身をもつて、こういった感性をつくるのが難しいことを感じます。

最近、若者の幸福度が実は高いのではないかという論考が発表されました。問題が山積している日本社会ではありますが、若者は今の世の中に幸せを見いだし、「別にいいじゃないか」とも思っているのではないかと。もし仮にこの論考が妥当であるのであれば、尚更他者への苦しみや悲しみへの感性を育まなければ、社会への関心は高まらないのではないかと思います。

ジョン・デューイは、民主主義を共同生活の一様式と定義し、多様な人々が共に暮

らすための哲学なのだと思います。多様な人々がみんな、この社会はいいと言えるようにする仕組みが民主主義であるということです。私たちは、今生きている社会が、自分だけの視点ではなく、多様性に根ざした視点で「共に暮らすに足るかどうか」を考え、それを正し続けていくために、政治的／社会的行為を営むのです。

政治的無感情な若者、社会的関心の高い若者

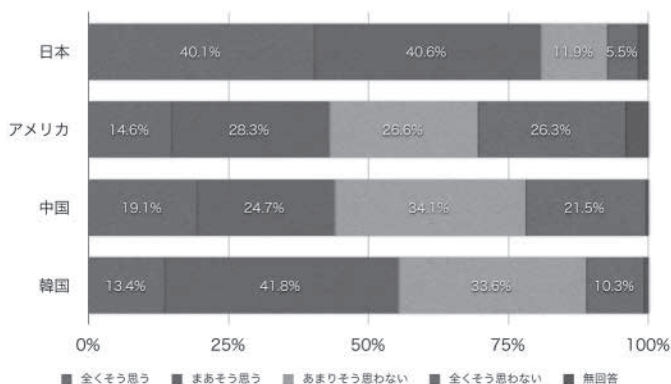
そのような市民はどのように育てられるのか、いま問われているのですが、一つの取り組みで、全てをカバーすることは絶対に不可能です。様々な形の学びが必要でしょう。その学びをデザインしていく際に、現代日本社会の若者が政治や社会をどのように捉えているのか、その傾向を理解することが一定求められるでしょう。

日本青少年研究所が行った「中学生・高校生の生活と意識調査報告書」（2009年）という日・米・中・韓の国際比較調査の中に、「私個人の力では政府の決定に影響を与えられない。」「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない。」「という設問があり、この2問の高校生による回答部分のみを抽出してみ

ました。日本では、私個人の力では政府に影響を与えられないと考えている人が8割に対して、他の国々では概ね4割〜5割です。もう一つの設問では、次のような結果が出ています。日本では、その強弱はありますが、私の参加によって変えてほしい社会現象が少しも変えられないと考えている人が7割ほどいます。一目瞭然ですが、米・中・韓と完全に反対です。一つの調査結果から断定はできませんが、日本の今の高校生は、政治的な無力感が強い傾向にあるのではないかと言えそうです。

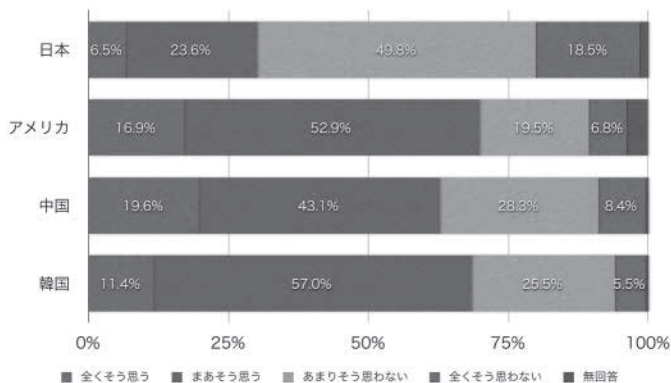
滋賀県では、県内の高校生全員に対し、「選挙に関するアンケート」をされておられますが、その結果でも同じように、政治に対して冷笑的な態度を示している人が多く出ていますね。ベンジャミン・バーバーは、政治的無感情は政治的無力の結果であると指摘しています。政治的無力感に支配されると、当然ですが、政治的な出来事に対して関心を持つことが無駄のように思われるでしょう。その意味では、政治的効力感の回復を通じて、政治的無感情を克服しなければ、私たちが「選挙に行こう」と言っても響かないのではないのでしょうか。意味を感じられにくいことに時間はかけないでしょう。忙しいから行かないのではなく、単に優先順位が低いと捉える方が適切

私個人の力では政府の決定に影響を与えられない



日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識・調査報告書」2009年（高校生部分のみ抜粋）

私の参加により、変えてほしい社会現象が
少し変えられるかもしれない。



日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識・調査報告書」2009年（高校生部分のみ抜粋）

だと思えます。このような中で、「1票に価値がある」「あなたの1票が決める」と言われても、お題目のように過ぎ去っていく可能性が高いのではないのでしょうか。その意味もあつてか、政権交代選挙があつたことはよかったと政治学者が言っているようです。確かに1票の重みを感じる機会になったとも言えるでしょう。

しかし、最近は若者の社会問題への関心の高まりを感じることは少なくありません。例えば、東日本大震災の支援でも、いち早く募金箱を持って、町に繰り出したのは若者でした。社会に役に立つ仕事をしたいと6割の高校生が答えた調査もあります。大学生の間でも、NPO就職や社会起業も選肢の一つとして確立してきています。「政治的なもの」に対する感情は劣化していつているかもしれませんが、社会的な関心は決して下がっているとは言えないでしょう。

ただし、注意すべきは、熱心に社会参加する若者とそうでない若者の分断です。アメリカでも、熱心な参加層だけが力を持つてしまうのは民主主義の考えからして好ましくないという議論が起こつてきています。この分断状況の中で非参加層が、好ましくない社会の現状の打破を自らの参加によってではなく、自らに代わつて取り組んで

くれる、力強いリーダーを追い求める動きを見せて、政治が暴走していく可能性も否めません。みなさんは、どのようにお考えでしょうか。

「問いかけ」と「手ごたえ」のある学び

このような若者を前にして、従来の公民教育や政治教育をどうバージョンアップしていけばよいのでしょうか。どういった学びや気づきを得る場が、どのようなメッセージの発され方が、どのような体験機会が、求められるのでしょうか。学校教育、家庭教育、社会教育のいずれであっても、私は二つの機会が特に必要ではないかと考えています。

一つは、掛け声ではなく「問いかけ」を得る機会、もう一つは「手ごたえ」が感じられる機会です。地域に参加しよう、ボランティアをしよう、選挙に行こう、投票に行こう、これらの掛け声は、「また言ってるよ…」と、多くの若者にやり過ぎされているのが現状でしょう。気づきを促す問いかけを考える時に、私はよく学校で行われているごみ拾いの模様替えを例示します。ごみを拾おうと呼びかけるだけでは、「は

いはい、言われてから、やったらいいでしょ」という姿勢の形成になりかねません。そうではなく、ごみを拾うだけではなく、拾ったごみを一度広げてみて、仕分けを行い、「こういったごみは、誰が捨てたのだろうか？なぜこの人はここにこれを捨てたのかな？捨てた人はこの道を汚くしてやろうと思ったのかな？何があれば、二度と捨てようと思わなくなるかな？」といった問いかけをしてみると、どうでしょうか。こうした問いかけは、思考を刺激し、社会問題の解決策を自ら考えていくことを促す契機となるのではないだろうか。

また、「手ごたえ」ということでは、若者の政策提案を例に考えてみましょう。高校生が首長などに「私たちが考える未来の〇〇町」といった提案をすることがありますが、一歩間違えると逆効果をもたらすと私は考えています。自分たちがすぐ考えて、熱意を込めて発表した内容に対して、首長などのトップが来て言うのは、「今日は非常に有意義な発表をありがとうございました。こういった若い人たちの意見を踏まえながら、未来輝く〇〇市政を推進してまいりたいので、今後ともご意見をいろいろと承りたく、よろしくお願い申し上げます。」といった台詞は多いですね。これは、必

死の思いでプレゼンテーションした若者からすれば「空振り」です。その後何のフールドバックがなければ、「私たちの提案はどうなったの？」と疑問に感じて当然です。提案が不採用なら理由を添えて、「もつとこの辺をこのように直してくれたら使えるよ」と伝えるのが求められる対応でしょう。首長にダイレクトに政策提案をしているのに、無回答ということでは、何も変わらないのではないかという思いを助長しかねません。「空振り」ではなく、「手ごたえ」を得られる工夫を行いましょう。滋賀県の前掲の調査では、ボランティア活動をした人の投票率は上がる傾向があるとされていますが、現場でのボランティアは、小さなことでしょうが、社会は自らの手で少しでもよくしていけるのかもしれないという「手ごたえ」を得ているからかもしれません。

「弱い問題意識」から始める

「問いかけ」と「手ごたえ」の学び場の一つの形として、私たちは京都で「ユース A C T (Active Citizenship Training) プログラム」を実践しています。まだまだ試行錯誤の繰り返しではありますが、今回はこの事例を紹介させていただきます。

簡単に言えば、高校生自らが見いだした社会課題を解決する企画をつくり、実行し、その中での成長を評価するという半年間程度の学校外教育プログラムです。評価では、自分たちはどれくらい他者の意見を尊重して議論できたのか、自分の意見をきちんと伝えられたかといったコミュニケーションに関する事柄もあれば、自分たちが動いたことで、一体どんな反応が地域社会や周りの大人に出たのかといったインパクトに関する事柄も扱います。この体験からの学びをシテイズンシップの形成につなげていくとしています。このプログラムでは、高校生のサポートに大学生サポーターが付き、その高校生と大学生のユニットをシチズンシップ共育企画も含む京都のNPOや青少年支援機関、福祉機関等の実行委員がサポートする形で実施しています。

様々な形で高校生が集まってくるので、参加者は決して社会問題に関心が高いとは限りません。ですので、最初に自分の問題関心に気づき、他者の問題関心を聴き、そのプロセスを経ながら企画を立案していくワークショップを丁寧に行います。人によっては、非常にかすかな問題意識なのですが、「問いかけ」を重ねていき、自分の中に実はある社会の問題意識を起こしていきます。日々の暮らしの中で私が抱く感情

の動き、それは例えば「ムカついた」という怒りの感情等を振り返る内省化を通じて、「実はそうだ！自分はこういうことにおかしいと思っていたんだ。」という気づきを得て、企画の方向が見いだされていきます。このあぶり出される「弱い問題意識」を実践の中でそれを強化していくのです。

昨年は「最近、嫌だなあと思った瞬間はいつか？」という問いかけが糸口となって、京都の中心市街地の駐輪問題が浮かびあがりました。高校生にとって、自転車は生活の足ですが、必ず空いている駐輪場の場所が分からず、路上駐輪したくなるが、撤去を恐れて、うろついてしまう、これが嫌だと。あるいは、自転車に乗らない人からすると、路上駐輪が交通の妨げになったり、路上にはみ出して歩く時に危険な思いをして嫌だと。

「まちの跡取り」として活動する

彼ら／彼女らは、こうしたつぶやきを背景に駐輪問題の解決策を考え、スクーリングと呼ばれる機会に、実行委員の前でプレゼンテーションを行い、質問や助言などを

もらいます。「〴〵についてはどう考えているの?」「こういうことは確かめた?」「こういうことをしようとは思わなかったの?」「本当にそのプランで人の行動は変わると思っているの?」など、様々な視点から問いかけられます。毎回、スクーリングが終わると高校生は凹むようですが、次にすべきことが見いだされていく時間でもあり、次第に「もっと頑張ろう」と思うようになります。実際に、昨年はスクーリングでのやりとりを受けて、まちのどこいうところにどれくらいの違法駐輪があるのだろうか、どこにどのような駐輪場があるのだろうか、フィールドワークに出たり、街頭で高校生や大学生80名弱にアンケートをとることとなりました。このアンケート結果は実に興味深いものでした。参加高校生は、駐輪場マップに周辺地域のお店の割引クーポンをつけたり、駐輪場の使用時にもらう半券が割引クーポンになるアイデアを考えていたのですが、街頭アンケートでは、そういったアイデアはあまり駐輪場利用と関係がないという結果が出たのでした。むしろ、そもそもどこに駐輪場があるのかよくわかっていなかったのです。京都市も駐輪場マップを作っているのですが、若者には知られておらず、また知っていても使われていないことも分かりました。こうした結果を

受けて、駐輪場の場所を知らせるツールとして、どのようなものが必要か、どのようにすれば捨てられないか、どういう形で渡すと心に響くのかといったことを考えた上で手づくりの地図を制作し、1000枚を全て手渡しで配布しました。

もちろん、この企画で駐輪問題が解決したわけではありません。しかし、非常に少数であったかもしれませんが、「助かるわ」と述べて地図をお持ち帰りになられた方がいたそうです。その時に高校生たちはハツとするのです。「役に立った」と「手ごたえ」を少しでも感じるようになります。

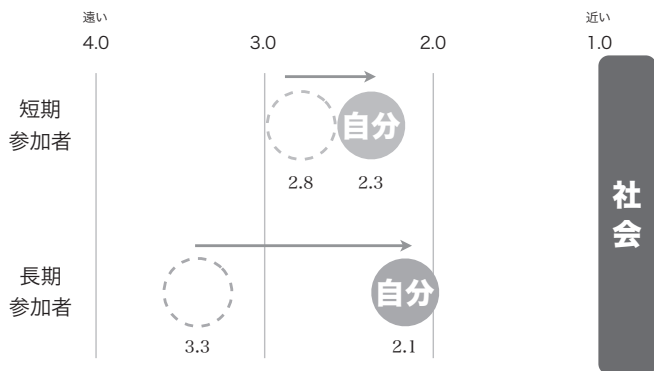
こうした企画実施を経た後は振り返りを経て、地域の人々に報告をしてプロジェクトを終わります。一連のプロセスを通じて、「まちの跡取り」としての自覚や自信の形成を進めていこうとしているのですが、ユースACTプログラムに参加した高校生の何名かは、東日本震災の支援活動でも、自分たちで企画を立て、現地の仮設住宅団地での交流会を地域の方と一緒に実施したという動きも見られました。こうした一人ひとりの成長を喜びとして、現在も活動を実施しています。

ちなみに、過去には大分や那覇でも同様のプログラムが展開され、現在は静岡でも

趣旨等は少し異なるのですが、似ているプログラムが実施されています。このように各地で広がりが見られると嬉しいですね。ノーベル文学賞作家のジョン・スタインベックはこう言います。「少年は必要とされて大人になる」。私たちは若者が「必要とされる場面」をいかにしてつくり出すのが問われているのではないのでしょうか。

なお、参加した高校生に対して、社会を私は縁遠いものと思うか、身近なものと思うかと「社会との距離感」の変化をたずねてみました。点線がプログラム参加前の数値で、実線がプログラム参加後

参加前後の自分と社会との距離感を表すと
いくつになりますか？



ユース・ACTプログラム実行委員会「参加者変容に関するアンケート調査」2011年

なのですが、長期間活動した人たちには、大きな変化が見られました。長期間の活動は、参加する高校生も、サポートする大学生も大変ですが、その分、得られる「手ごたえ」は大きなものとなり、効果が少しでも高まるのではないかと考えています。

自分の進路を大きく選択する高校生の時に、自分たちが社会を変えていく主体となりえることに気づき、社会とのつながり方を知り、大学生サポーターや実行委員の大人といたりリアルなロールモデルと出会う中で、今後の生き方や学び方、働き方を模索している高校生の姿の傍にいと、豊かな成長ぶりに私が驚かされます。

活動的シティズンシップから政治的シティズンシップへ

シティズンシップ教育や主権者教育では、政治参加の重要性が非常に強く説かれます。私もその重要性については全く異論ありませんが、まずはこうした市民活動参加からスタートし、自分たちが現場で動くことで得られる「気づき」や「手ごたえ」をベースに置いてから、徐々に自分たちが変えたいと思っている社会課題は、市民活動だけでは動かしきれず、政策が必要だ、行政との協働が必要だと気づき、政治参加へ

の意識が高まっていく流れの方が良いのではないかと考えています。一見迂遠に見えるでしょうが、市民活動参加支援は、政治参加促進にもなり得ます。

「政治」は、私たちの暮らしをよりよくしていく営みとも言えるでしょうが、ウルリッヒ・ベックが提起しているように現代社会では、議会などの制度化されている現在の統治装置による「メイン政治」だけではなく、既存政治システムの〈外部〉にいる行為主体による個々人の動きや社会的集合行為からなる「サブ政治」もまた、私たちの暮らしをよりよくしていくことに対し大きな影響力を持っているからです。

熟議型民主主義の実践

残された時間では、ユースACTプログラムの他にも、私が関わった実践事例を幾つか紹介していきます。まずは「NPOの視点でマニフェストを読む会」です。投票の質を上げるために、NPOそれぞれの専門分野からマニフェスト比較をしてもいい、その比較を通じた意見交換を行う場を国会議員選挙の時に京都で設けました。持ち合わせている情報からよりよい判断に結び付けるために、その情報を吟味する議

論のためのコミュニケーション空間となる「広場」を設けたのです。ユルゲン・ハーバーマスも『新たな不透明性』（松籟社、1995年）に所収された論文でこのように書いています。

「意見・意思形成の制度化された過程と公的なコミュニケーションのインフォーマルなネットワークとの相互作用が発生する場合にのみ、今日のシティズンシップは政治的な個人的利益の集計およびパターンリスティックな国家の権威によって個人に付与された権利の消極的な享受以上のものを意味するのである。」

政治が真によいものとなるためには、熟議のための公共圏を豊かにしていく必要があるのです。最近では、熟議型世論調査への注目も高まってきています。単純に支持／不支持を聞くだけではなく、無作為抽出で選ばれた集団での小グループ討議で（専門家からの情報提供も受けつつ）意見交換を行ってから、世論調査を行うというものです。考え込まれた公論を調べようというものです。その事例としては、国際的なネットワークの中で行われた「World Wide Views in Japan」（大阪大学・上智大学主催・北海道大学 CoStep 共催）が挙げられます。デンマークで行われたCOP15（第15回

気候変動枠組条約締約国会議）に世界中の市民の意見を届けるために行われたものです。私もグループファシリテーターを担当したのですが、小グループでの討議の中で参加者はテーマに対する学習と理解が進み、主体性が立ち上がり、意見に広がりが出てくるといった変化が印象的でした。こういった場づくり、これからこそ丁寧に取り組んでいく必要が高いでしょう。

修士論文の研究で調査に入らせていただいたお茶の水女子大学附属小学校では、「市民」という教科を設け、価値判断力と意思決定力を形成する授業をしていますが、そうした学びが熟議を支えることになるのでしょうか。

京都市がユースビジョンと一緒に「青少年モニター制度」という京都市政への若者の参画を進めています。同制度のワークショップのファシリテートも担当させていただいています。行政の各部局から、現在の施策の課題や今後の方向性で判断の別れるものについて、青少年モニターがグループで意見交換を行いながら、具体的な提言をまとめる仕組みです。この制度は、提言された結果をどのように活用したのか、担当部局からフィードバックされる仕組みを設けていることなどに特徴があります。

他には、市民の政策提言力を高めるワークショップや、市民と行政職員が一緒に地域課題の解決策を検討するワークショップの進行などもしています。また、こうした民主主義を実現させるための諸活動は、ベースに「いい話し合い」を可能にするコミュニケーションが求められますが、自他の考えを分かち合いながら、合意を形成していく対話の力を習得するワークショップの実施も進めています。

フォーマル教育とノンフォーマル教育の調和

日本では多くの地域で、単発的に様々な企画が取り組まれている状況ですが、今後は体系化していく必要があるでしょう。イギリスでは学校教育の中でシテイズンシップ教育が制度化されていますが、日本での体系化に際しては、そうした海外の動きも参考にしていけるといいですね。ただし、学校教育（フォーマル教育）だけで全てを充たすことは不可能です。明推協や私たちのような教育NPOによる、ノンフォーマル教育もまた、重要な役割が期待されます。学校教育には、大きな可能性もあります。同時に市民社会への体験的理解が教員に十分ではない場合や、時間的な制約のもの

とで本当の気づきを得られるような実践機会を提供できない場合も考えられ、限界もあります。本当に社会を動かしている人と出会い、一緒に何かを試みるといった学ぶの場づくりや、学校を卒業した成人に対する学習機会の保障等、学校外教育の必要性は確かにあります。このフォーマル教育とノンフォーマル教育の調和こそ、私たちが目指すべきものでしょう。

力のある存在としての自覚を育む

イギリスでシティズンシップ教育を提案した会議を取りまとめたバーナード・F・クリックは、『デモクラシー』（岩波書店、2004年）の中でこのように記しています。

「私たちの目標は、若者一人ひとりがコミュニティへの新たな関わりかたを大胆に発見し、自分たち自身で行動してゆくようにすること。」

私たちはそれぞれの現場で、若者が社会の中で、自らを力ある存在と自覚して、その力でもって社会を動かす態度を形成していける道筋を大胆に提案していければと思

っています。ご清聴、誠にありがとうございました。（拍手）

シテイズンシップと政治的リテラシー

東京大学大学院教育学研究科教授 小玉 重夫

平成23年11月21日 於 千葉県千葉市

東京大学の小玉と申します。よろしくお願いします。

早速ですが、本日の講演に入らせていただきたいと思います。「シテイズンシップと政治的リテラシー」という、多少耳なれないテーマで今日はお話をさせていただきます。

なぜこういうテーマになったかといいますと、今、総務省のほうで「常時啓発事業のあり方等研究会」というのをやっておりまして、私も参加しているのですが、ここがこの7月に中間取りまとめを出しました。その中でシテイズンシップ教育ということとをこれからの常時啓発事業の中心に据えなければいけない、そして、常時啓発事業

が新しいステージに立たなければならない、そういうことが言われるようになってきていまして、その中で、このシティズンシップ教育と、それから政治的リテラシー——政治的リテラシーについてはまた後でお話したいと思います——ということが、この常時啓発事業の研究会の中の中心的な話題として出るようになってきている。それが今日の私の話のテーマの中心にもなっています。「シティズンシップ教育」という言葉、それから「主権者教育」という言葉です。

地域で明るい選挙推進活動などに関わられた皆さんは私以上に御存じのことだと思うのですが、日本の選挙啓発活動というのは、選挙管理委員会と明推協の活動に支えられて運営されているわけですが、それは選挙のときだけではなくて選挙のないときも、常時啓発活動という形で日々、投票に行くということに関する啓発、それから、選挙に関して知っておかなければならない様々なルールに関する啓発活動を行ってきたわけです。

昨年から蓮舫大臣たちが事業仕分けというのを政府のもとでやっていますけれども、実は、この事業仕分けの中で、常時啓発活動の事業が必ずしも効果を上げていないの

ではないかという意見が出まして、見直すようにという指摘をしたようです。そして総務省の方でこの結果を受けて、改めて常時啓発活動というものがこれから必要なのかどうか、もし必要だとすれば、それをこれからどうしていかなければいけないのかということについて、研究会を立ち上げて改めて少し議論しようということで、今年の2月ぐらゐから議論を始めています。その中間答申が7月に出しました。

今までの常時啓発活動は、確かに重要な活動をしていたわけですが、やや十分でなかった点があるとすれば、それは何か。「子どもから高齢者まであらゆる世代を通じて、社会に参加し、自ら考え、自ら判断する自立した主権者をつくる」という、それを主権者教育と呼んでいるわけですが、特に、学校教育の中で政治教育とどうか政治的な教養というものを育てていくということが、必ずしも十分行われてこなかったのではないかということが議論されました。ですので、これからの常時啓発活動は、主権者教育という形で、子どもたちに対する教育、若い世代がもっと政治や選挙というものに関心を持てるようにしていくことを考えなければいけないというのが、私たちが考えている方向性であるということです。今日の話もそのことを中心に、

なぜこういうことを今総務省の中で考えているのかという背景も含めてお話しさせていただければと思っています。

そこで、「新しいステージ」という言葉が出てきているのですが、なぜ新しいステージなのかということで、ざっとこれまでの流れを追ってみます。

これは明推協のホームページに載っていたのですが、明推協の歴史というのは、昭和27年の公明選挙運動、公明選挙連盟というところから始まって、そして、それが現在の明るい選挙推進協会というものになり、昭和51年の4月に財団法人になって現在に至っているという、こういう流れになっています。昭和27年の戦後に始まって、戦後60年間ずっと続いて今日に至っている。ですから、第2次世界大戦が終わった後の民主主義を実質的に支える団体として発展してきているわけです。

そこで、戦後民主主義というのが一体何だったのかということですが、NHKの連続テレビ小説で「おひさま」というのがありました。これは今年の9月で終わって、今は「カーネーション」をやっていますけど、カーネーションも昭和9年ぐらいの話になっていますから、おひさまと大体同じような時代を扱っています。

おひさまの話というのは、井上真央さんが演じている陽子先生という先生が主人公だった。小学校の先生で、戦前の国民学校の先生をやっていたわけですが、第2次世界大戦で日本が戦争に負けて、国民学校から戦後の小学校にちょうど切りかわる時代を、小学校の教員として経験する、というのがおひさまの中で出てきました。

私も毎回見ていたのですが、その中で印象深いシーンが幾つかありました。その1つは、戦争が終わって国民学校から戦後の小学校に変わるんですけれども、その時に、教科書に墨を塗るというシーンが出てきます。教科書に墨を塗るということは、それまでの教育のあり方が間違っていたということを、教師として生徒に対して言わなければならないという経験をする。これは陽子先生にとっては非常に大きな経験だったということがありました。

それからもう1つは、新しい国民学校から小学校になったときに、これからの小学校では民主主義の教育をするのだということで、級長さんを選挙で選ぶということが出てくるのです。今は学級委員などという言い方をしていますけれども、この級長さんを選挙で選ぶということが戦後民主主義教育の1つの象徴的なシーンとして描かれ

ています。

つまり、明推協が昭和27年に発足するわけですけども、その出発点にあった精神というか思想、考え方というものが何であったのかというと、それは、一言でいえば、戦後民主主義の始まりということです。戦前から戦後になり新しい時代になった、その新しい時代を象徴するものが民主主義という考え方であり、民主主義というものを知る、あるいは、考え、学ぶ、その重要な場として学校教育というものが存在していたということです。このことは恐らく私たち一人一人の受けてきた教育の経験の中にも確実に存在していたであろうと思います。

そして、そういう時代がずっと続いてきたわけですけども、ちょっと時代が進んで昭和30年代。最近公開されていた「コクリコ坂から」という映画がありますが、このコクリコ坂からという映画は、1963年ぐらいの時代の高校生を描いている映画です。当時の高校生というのは、今に比べるとかなり色々な政治活動を行っていたというところがこの映画の中に出てきます。生徒会活動が非常に活発で、当時、中学校でも高等学校でも、教師に対して生徒が、制服の自由化とか色々な要求を出していくと

いう、まさに民主主義の精神というものを体で受けとめて、そしてそれを実践していった世代だったと思います。映画の中では、高校の部活動で、文化部の哲学研究会とか新聞部とか天文研究会とか、色々な研究会のサークル部屋が集まっているカルチェラタンという古い建物が、老朽化しているので取り壊すというのが学校当局から出されて、それに対して新聞部や生徒会が反対しているということで、その反対運動の中心になっていくのが主人公たち高校生なんですが、そういうことを描いている映画です。こういうことにも示されるように、昭和30年代から昭和40年代ぐらいというのは、

中学生や高校生というのが今の私たち以上に非常に活発で、しかもその活発さというのはある種の民主主義というものを体現したもので、教員に対していろいろな要求を出したり、時にはそれが授業のボイコットとか、そういうものに進んでいくような場合もあったかもしれないけれども、みんなで議論をして自分たちの要求を出しているような、そういうことを通して、民主主義とは何か、あるいは政治とは何か、政治に参加するとは何か、ということを感じていくというような時代がありました。こういう時代というのは、若者がよくも悪くも政治的に飛びはねていたような時代

です。今の若い世代も、もちろん元気だとは思いますが、昭和30年代、40年代の頃の中学生や高校生と比べると、やはりちよっとおとなしくなっている。特に日本の若者、中学生や高校生を見ると、昭和30年代、40年代のころの中学生、高校生、大学生のほうが、今の中学生、高校生、大学生よりもまだ、上の世代に対してとか社会とか世の中に対して、例えば、抗議の声を上げるとか自分たちの要求を出していくということがすごく活発だったのではないかと思うわけです。こういう時代であれば、例えば、投票に行こうとか選挙に行こうというようなことをあえて声高に言わなくても、民主主義社会というものがこういう若い世代に支えられて動いていくということがあったわけです。

しかし、それが近年やや形骸化してきているのではないかということです。若者の政治離れということが言われています。常時啓発事業のあり方等研究会という先ほどの研究会の中でも、このことが、私たちが考えなければいけない問題の1つだということでも議論されています。中間報告では、「我が国の学校教育では、政治や選挙の仕組みは教えるものの、政治的・社会的に対立する問題を取り上げ、政治的判断能力を

訓練することを避けてきた。また、高齢者は、確かに投票義務感は高いが、政治的リテラシーについても果たして十分に備わっていると言えるであろうか。平成6年に選挙制度が改正され、候補者個人よりも政党を重視して投票する人がふえてきたが、最近の選挙を見ると、利根的な話題や一点集中的な報道に左右される例が少なくない。政策の選択はもちろん、人の選択に関しても、候補者の人物や見識を吟味し適切な選択を行う必要がある。多くの政策課題に世代間の対立を超えて適切な選択を行っていくためには、若い世代だけでなく高齢者も、政治的リテラシーを高めることが必要である。」ということで、かなり現状に関して厳しいというか、やはり、これは考えなければいけないのではないかというような、そういうことが書かれてあります。一言でいえば、戦後民主主義の形骸化ということになるかと思います。もちろん、この認識自体果たしてそうなのかということについてはいろいろな御議論があるかと思いますが。そのあたりについては、これはまだ中間報告なので、年末から正月ぐらいにかけて最終報告をつくろうと思っておりますので、もし何かありましたら、近くの明推協等々を通して御意見等をいただければと思います。

しかし、少なくとも、政治的リテラシーというものが備わっていないと、民主主義というものは育たないのではないかと思います。これが今回の報告の1つの骨組みになっているので、政治的リテラシーというものが一体何なのかというところをもう少しお話ししたいと思います。

研究会が提案している、新しいステージにおける政治教育のあり方なんですが、キーワードとして2つ設定されています。1つが「社会参加」、もう1つが今言った「政治的リテラシー」ということです。

社会参加というのは、社会参加意欲が低い中では政治意識の高揚は望めないということ、社会に参加する意欲を高めていこうと。投票率が高いか低いかというのがこれを判断する1つのメルクマールになるかと思いますが、どちらかといえば比較的年齢層の高い層については、社会参加意欲はそれなりにあると評価できるかもしれませんが、若い世代は投票率が非常に低いので、社会参加意欲が低いということになるかと思います。

それに対して、政治的リテラシーというのは、情報を収集し、的確に読み解き、考

察し、判断する訓練ということ、どちらかといえばこちらは量というよりも投票の質にかかわる問題です。投票率が単に高ければいいという問題ではなくて、投票の質がより向上していくことが必要で、そうしないと、先ほど申し上げた、刹那的な情報、雰囲気とか、あるいは1つの争点だけに集中して、ムードに流されて投票してしまうことになりがちなので、よくよく考えて投票できるような能力、それを政治的判断能力、政治的リテラシーと言っていますけれども、これを高めていくということ、この2つを二本柱にして現代に求められる新しい主権者像というものを考えていこうというの、これが中間報告の1つの考え方になっております。そして、そういう主権者を実現させるためにシティズンシップ教育というものが必要だということになっていきます。これは3つポイントがありまして、「①諸課題に対処し適切な選択が行われる高い質を持った有権者を育てる。②子どもたちに主権者という自覚を持たせる。③体験型・参加型の啓発を重視する。」というように言われています。

社会参加のほうでいいますと、低投票率ということが非常に問題になっているわけです。例えば、先日行われた埼玉県の知事選挙が史上最低の投票率だったということ

が言われたりしているわけで、投票率を何とか上げなければいけないということが言われるようになってきているわけです。

他方で、政治的リテラシーとの関係で見ますと、たとえば、2000年代に入ってから、前々回の総選挙のときに郵政解散というのがあって小泉劇場とよばれました。それから、一昨年の2009年の総選挙では政権交代がありました。いずれの総選挙も投票率が非常に高かったわけです。地方でも、昨年の名古屋の市長選や愛知県の知事選挙は非常に投票率が高かった。それから、まだ結果は出ていませんけれども、今度の大阪の府知事選挙や市長選も、おそらく高い投票率になるだろうということが予想されるわけです。

このように、それなりに争点があったり、私たちが関心を持つような話題があったりすれば、みんな投票に行くのです。そして、それが時々の時代状況を左右する、今そういう時代になっています。一時代前に比べると、むしろ2000年代に入ってからの方が、選挙によって世の中の動きが変わっていくことがむしろ大きくなっています。1960年代、1970年代ぐらいは、投票率は高かったかもしれませんが

んけれども、選挙で政権がかわるとか、そういうことはあまり考えられなかったわけです。しかし2000年代に入ってから、選挙で過去2回連続の総選挙、小泉さんのときも民主党が勝ったときも、どちらも総選挙で時の政権が支持されたり否定されたりするという形で、私たちの1票が政治の構造をガラツと変えていくということになっていますし、地方でも、昨年の名古屋や愛知の場合も、結果はまだ出ていないのでわかりませんが大阪の場合も、市民の1票1票というのがものすごく大きく政治の方向を左右するという、今そういう時代に実はなっている。これは、戦後民主主義がまさに新しいステージに入っているということの1つの現われであると考えなければなりません。

そう考えていきますと、ただ単に投票率を上げることだけではなくて、政治的リテラシー、つまり私たち自身が、その時々々の政治や社会の方向に決定的に大きな影響力を与えるのだということを前提とした、より高い政治的判断ができるような有権者を育てなければいけないということになる。それが政治的判断能力を育てるということにつながってくるわけです。

もちろんこれは、一朝一夕に育つものではないので、特に若い層に関しては、投票率も低いし政治的リテラシーのほうも十分とは言えないという、そういう世代に対してはより重点的に政治教育を行っていく必要性があるというのが新しいステージにおける新しい主権者像の考え方になっています。その際にシティズンシップ教育という考え方で主権者教育を行っていくということになっています。

そこで、先ほどから何回も話に出てきている、シティズンシップとは何なのだという話になります。別に片仮名で言わなくてもいいわけで、日本語に訳すと市民性、市民という言葉でもいいですけれども、人によって市民権と訳す人もいますし、市民という言葉を使わないで公民と訳す人もいます。訳し方がいろいろあるので、シティズンシップという英語をそのまま使おうということでシティズンシップという言葉で言われることがどちらかといえが多いと思います。

シティズンの由来をさかのぼれば古代のギリシャにまでさかのぼり、古代のギリシャでは、都市国家（ポリス）で直接民主主義の政治が行われていて、民主主義の政治に参加するポリスの構成員を指す概念でした。つまり、ある1つの政治体制を構成す

る構成員を指す概念で、政治に参加する人という意味だと思ってください。千葉市民とか柏市民という場合の市民というよりも、もうちょっと深みのある概念というか、民主主義の主権者というような意味合いで、ここでは市民という言葉が使われています。例えば、市民運動という意味で市民という言葉が使われることがありますけれども、それにどちらかといえば近いかもしれません。

それからもう1つ、市民という言葉には、専門家に対する素人という意味も含まれています。市民ランナーという場合の「市民」に近い意味ですね。例えば、今日ここにおみえになっている皆さん方もそれぞれ、さまざまな職業、さまざまな地位につかれていますということがあると思うのですが、その場合の私たち自身の職業とか地位というのは、どちらかといえば専門性というものに対応しています。例えば、私自身は大学の教員なので大学の教員としての専門性を背景にして仕事をしているということになるわけですけれども、同時に私たちは、有権者として1票を投じるときは、必ずしもそういう職業とか地位ということを背景にして投票するわけではなくて、むしろ市民という立場から投票しますので、その意味でいえば専門家ではない素人としての

立場で投票するわけです。

私自身大学の教員ですけども、選挙に行って1票投票するときには、別に大学の教員であるという立場で投票するわけではなくて一市民として投票するわけです。そして投票するときには、例えば消費税の問題とかT P Pの問題とか、最近の議論でいうとエネルギー政策の問題とか、色々なことを考えて投票しますけれども、T P Pの問題は経済学者ではないので私は素人です。それから、エネルギー政策についても、私は原子力の専門家ではありませんので素人です。素人なんだけれども、エネルギーの問題やT P Pの問題についてはやはり素人なりに考えて投票します。ですから、市民として物を考えるときは、必ず多かれ少なかれアマチュアという側面がどうしてもついてくるのです。

シティズンシップ教育という場合にも、どちらかといえばアマチュアとして物を考えるというところがすごく重要になってくる、ということ、シティズンシップ教育が言われるようになってきている面があります。その背景や、具体的にどういうことをやるのがシティズンシップ教育なのかということをお話したいと思います。

今、色々な国でシティズンシップ教育というのが始まっています、日本が参考にすることが多いのはイギリス政府がやっているシティズンシップ教育です。バーナー・クリックという政治学者が中心になって政策を決めたので「クリック・レポート」と呼ばれています、そこで3つの要素というのがイギリスのシティズンシップ教育では重要視されています。1つは道徳です。もう1つが奉仕活動とかボランティア活動ということ。最後に、総務省の研究会でも取り入れられた政治的リテラシーです。道徳と奉仕活動・ボランティア活動、そして政治的リテラシー、この3つを全体として合わせたものをシティズンシップと呼んでいて、それを教育するものがシティズンシップ教育だと言われています。

そういうふうに考えていきますと、実は今、日本で行われている学校教育の中にもかなりこういうシティズンシップ教育に相当するものはあるわけです。実際、道徳の時間というのは存在していますし、奉仕活動とかボランティア活動というのも、これも最近学校の中ではよくやるようになってきています。95年の阪神淡路大震災のときもそうでしたし、今回の東日本大震災のときもそうでしたが、ボランティアで地域の

復興に行く若者が増えてきている。これは1995年の阪神淡路のときがボランティア元年と言われていたのですが、そのときからずっとボランティア活動の重要性ということは日本でも認識されるようになってきています。

そして、3つ目の政治的リテラシーですが、実はこの政治的リテラシーがどちらかといえはやや取り組みが弱かったということなのだと思います。なので、今回常時啓発事業のあり方研究会でも、特に、政治的リテラシーを重視する形でシティズンシップ教育を考えていこうということが言われるようになってきていますし、イギリスでも、政治的リテラシーというものの重要性がシティズンシップ教育の中で言われているということなのです。

なぜ政治的リテラシーが必要なのかと、道德とボランティアだけでもいいのではないかということも議論としてはあり得るわけですが、先ほどのイギリスのシティズンシップ教育を主導しているバーナード・クリックによりますと、もし政治的リテラシーがなくて、道德とか共同体への参加、ボランティアだけだと、ボランティア活動一辺倒になって、国家、社会や共同体にとって都合のいい「単なる使い捨ての要員」を

育てるだけになってしまおうということが言われています。

これはどういうことかといいますと、確かに道徳も重要だしボランティア活動も重要なのですが、学校教育の中でそれだけが一面的に強調されると、戦前の国家総動員体制のようなものを想定する人もいるのですが、無批判にというか都合よく使い回しのきく使い捨ての要員として、国民によって動員するということに使われてしまう危険性がある。なので、都合よく動員されるようなそういう国民ではなくて、「政治文化の変革を担う積極的な市民」の育成をシティズンシップ教育の中に位置づけるべきである。そのために政治的リテラシーを中心とする政治教育が必要だということが言われているわけです。

今回の震災でも、ボランティアとして被災地に行って復興の支援をすることが重要だということが認識されていて、実際に多くの人たちがボランティアとして被災地の復興を助けているわけです。と同時に、どういう復興をするのかがとても重要になっています。

ボランティアも重要なんだけど、今後の地域のあり方や社会のあり方をどうす

るのかということを巡ってはさまざまな対立する争点や論点というものがある。そういう対立する争点や論点、そういうことに關して、自分たちの頭で、まわりがこう思うからそれに合わせてやろうというのではなくて、一人一人の市民が一市民としてどう考えるのかというところを、これをやはり教育の中で子どもたちから養成していかなければいけないのではないかというのが、これが政治的リテラシーということが強調されるようになってきた大きな背景として存在していると思います。

イギリスのシティズンシップ教育の中で政治的リテラシーということはかなり細かく議論されていまして、重要な知識を獲得して、自分の利害と社会的な責任について考える。それから、行動のための技能を身につける。それが政治判断や政治参加というものに結びつくという、全体を通して政治的リテラシーというふうに言っていますので、非常に広いのですけれども、その中心をなしているのは「争点を知る」というところです。争点に関する様々な反応や政策や対立を知るといって、ここを中心にして政治的リテラシーというものが考えられています。そして、それを教育するということとが非常に重要だと言われています。

例えば、近年の選挙で争点になっていたのは、子ども手当をどうするかとか高速道路の無料化をどうするかということがありました。後で紹介しますけれども、既に日本の小学校でも、子ども手当をどうするかとか高速道路の無料化をどうするかという、そういう争点をめぐって子どもたち同士が議論するという授業をしている例もあります。

それから、エネルギー政策の問題にしても、放射線の問題というのが今議論されていて、放射線というのは物理学者ではないので詳しいことはわからない。実は今の中学や高校の理科の教科書には、放射線についての内容というのが書かれていないという問題があります。私が高校か中学のときには、確かそういうのを習った記憶はあるのですが、すっかり忘れているという状況があります。そうしますと、放射線が危ないと言われてもなぜ危ないのかとか、そういうことは実はわからないわけです。わからないままに、今まではとにかく安全だと言われていたわけですけれども、それがこういう事態になったときに、逆の方向に議論がシフトし、すごくそれは危ないのではないとか、本当にどこまで安全なのかということを判断しなければいけないという

問題が出てきます。

私も今、東京大学に勤めているので身近な問題として考える機会もあったのですが、東京大学のキャンパスは、東京都内の駒場と本郷、それから千葉県の柏にありまして、3月11日の事故以降、東京大学として放射線量を測定してホームページ上で全部公開しているのです。駒場と本郷と、それから柏の放射線量については毎日公表しています。そうしますと、柏の放射線量の値が本郷や駒場に比べると高い数値で出てきているわけです。それに関して当初、東京大学のホームページでは、なぜ柏が本郷や駒場に比べて高いのかということに関しては、これは必ずしも今回の原発の事故の影響ではないという趣旨のことが書かれてあったのです。東大のホームページにそういうふうに書かれてあったので、柏市とか周辺地域の行政のほうでも、東大のホームページにこういうふうに書かれてあるから安全だというようなことが役所のホームページにも出ていたようです。それで、私も参加したのですが東大の教員の有志が東大の本部に、この記述はおかしいので直したほうがいいのではないかということを要望しましたところ、本部のほうも直しました。今のホームページにはその記述はなくなっています。

ます。これは1つの例ですけれども、要するに、東大のホームページだから当然専門家がつくっているだろうと思うわけです。しかし、だからといって必ずしもそれが100%正しい情報で書かれているとは限らないという問題があります。

なおかつ、放射線の問題とか原子力発電の問題については、専門家の中で意見が分かれているわけで、Aという専門家とBという専門家に話を聞くと、全く違う意見が出てくるわけです。そうしますと、その際に何が争点になっているかというところを知らなければいけないわけです。とりあえずA先生とB先生は違う意見を言っているということはわかるけれども、そのA先生とB先生の意見はなぜ対立するのか、争点を知らないことには、私たちはA先生の意見とB先生の意見のどっちを受け入れたらいいのかという判断がつかないという問題があります。なので、争点を知るところをまずは教育するということです。そこが重要だということです。

この放射線の問題もそうですけれども、例えば、TPPの問題もそうだと思いますし、今私たちの社会の方向性をいわば左右する問題について、すごく議論が分かれているということは多いわけです。その際に、争点が何なのかというところを知るとい

うところが政治という問題を考える際には非常に重要だということです。それを子どもものうちから考えていくことが重要なので、学校教育の中で政治教育というものをつかりとやっていくということが、イギリスでも言われ、そして日本でも言われるようになってきているということです。

ただ、言うのは簡単だけれども、なかなかこれを学校の現場でやろうとしても難しいのではないか。高速道路の無料化でも原子力発電の問題でも、そういう政治的に非常に意見が分かれている問題であればあるほど、学校現場でそれをやるということは、どうしてもある種の政治的な偏りが生まれてしまうのではないか。本来、学校というのは政治的には中立でなければいけないはずなのに、政治的中立性というものを疎かにしてそういうことをやっていいのかという問題が出てくるわけです。

そこで、論争の問題をいかにして教育するかということに関しても、クリック・レポートの中では書いていまして、3つぐらいのアプローチが提案されています。教師が子どもたちに対して、論争的な課題をどうするかということで、中立性アプローチとバランスアプローチ、それから意見を言うアプローチという、この3つのアプロー

チを効果的に組み合わせれば、中立性を損ねることなく論争的な課題を扱うことが可能になるという提案がされています。

1 番目の中立性アプローチというのは、文字どおり中立的に、子どもたち同士にとりあえず議論させるんだけれども、教員はあくまでも中立的な審判員の役割を果たすというようなそういうアプローチです。

2 番目のバランスをとるアプローチというのは、子どもたちが議論しているときに、どうしても1つの方向に議論が偏ってしまいがちのときには、あえてそっちではないほうの味方をするということです。例えば、高速道路の無料化について子どもたちが議論していたときに、40人子どもがいて、38人は高速道路無料化反対で、2人が賛成だったとすると、教員は2人の側の味方をして、それによってクラス全体の意見が1つの方向に流れないようなバランスをとるというのが2番目です。

3 番目は、これは教員自身が自分の意見をはっきりと言うことで、子どもたちに問題を投げかけるというアプローチです。例えば、原子力発電の問題について、自分はこう思うんだけど、君たちどう思う？ というような形で、問題を投げかけることに

よって教師が子どもたちに対して問題提起をするというアプローチ。

この3つを有効に組み合わせることによって論争的な課題というものの教育が可能になるのではないかというふうにクリック・レポートでは書かれていますし、この考え方は日本の教育を考える上でも非常に示唆に富む考え方になっているのではないかと思います。具体的な例としていいますと、私が前任校で勤めていたお茶の水女子大学の附属小学校では、シティズンシップ教育に関して実験的な研究を既に始めています。従来は社会科という名前だったのですが、社会科を「市民」という名前にして、その中で論争的な社会事象について、他者との差異や葛藤を重視するという教育が行われています。具体的に取り上げている論争的な課題としては、諫早湾の干拓をどうするかとか、先ほど言った高速道路の無料化、子ども手当、原発といった問題をテーマに討論し、価値判断と意思決定を行うという授業を実際に展開している学校があります。

それから、政府レベルでも、「シティズンシップ教育の推進」を唱える動きが活発化していて、内閣府が昨年7月に「子ども・若者ビジョン」を出しているのですが、

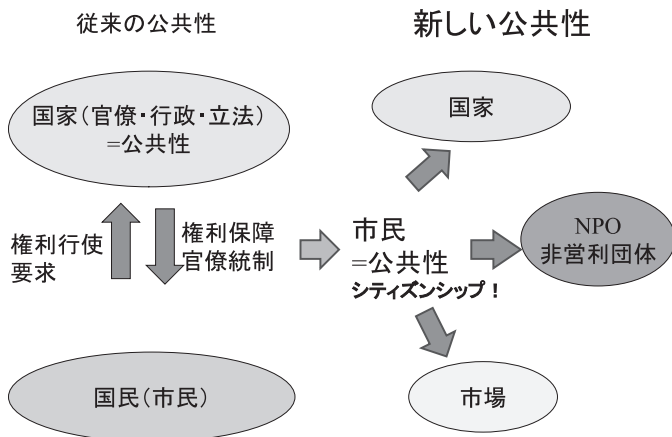
その中で、政治的教養を養うための政治教育が今の子ども・若者政策には非常に重要になってきているということが言われるようになっていきます。このように日本の学校教育の中でも、少しずつではありますけれども、シテイズンシップ教育の具体的な展開が見られるようになってきています。

そして、そういう流れを受け継ぎながら、もう少し広い枠組みでいうと、「新しい公共」という考え方の中で市民の位置づけというのがより重要な重みを持つものとして考えられるようになってきています。新しい公共という言葉もかなり前から言われていて、2003年の3月には「新しい『公共』を創造し、21世紀の国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成」という中央教育審議会が出した答申があります。それが現行の教育基本法の第2条3号にある「公共の精神」という規定につながっています。一昔前であれば、公共という言葉は、どちらかといえば国家とか国、あるいは行政というものとほぼイコールで、行政とか官が担うのが公共だというふうに考えられてきたのですが、2000年代になって、従来国とか行政、あるいは官というものと等値されてきた、イコールと言われてきた公共というものを一人一人の市民が担

うものとしてとらえ直していこうという動きが出てきています。

2010年1月の鳩山首相のときですけれども、「新しい公共」円卓会議というのができて、所信表明演説で、『新しい公共』というのは、人を支えるという役割を、『官』と言われる人たちが担うのではなく、教育や子育て、街づくり、防犯や防災、医療や福祉などに地域でかわっておられる方々一人ひとりにも参加していただき、それを社会全体として応援しようとする新しい価値観です。」と言っていました。今読んでいて気づいたのですが、「参加していただき」という言い方ですと、やや上から目線という気がしますけれども、それはそれとして、こういう官というところにだけ集約されない、一人一人の市民が公共性を担うのだという考え方ですね。これが強調されるようになってきていますので、そう考えてきますと、市民も公共性の担い手であるという、その場合の公共性というものの中には当然、民主主義とか政治ということが不可欠の構成要素として含まれているのだというところが非常に重要なポイントになってくるわけです。

今言ったことを図式的に考えてみますと、少なくとも、昭和40年代ぐらいまでは国



イコール公共性というような構造があったと思います。そして、国民（市民）というのは、国との関係でいうと、下に位置するということかそういう関係になっていて、もちろん日本国憲法で基本的人権というのがあって、国民は国に対して権利を行使するわけですけども、それはあくまでも国に対して権利を行使し要求するという関係であり、それに対して、国は市民に対して権利を保障する。と同時に、コントロールをしていくという、こういうある種の上下関係というか、国民は国に対して要求をする。それに対して、国が市民に対して権利を保障していくというような、こういう上下関係的なものを前提にした対立関係といいたいまいしょうか、二者

の構造というものがあって、それがずっと戦後続いてきたという流れがあるかと思います。もちろん民主主義は民主主義なのですが、そのところの民主主義というのはまだまだ国民は国家に対して権力を要求する要求者としての関係という構図で、明推協の活動も含めて、戦後60年、70年と、戦後の民主主義は、発展はしてきましたけれども、まだまだ市民自身が公共の担い手であるというところまでは行っていないかったという時代で、「従来の公共性」と書きました。それが、社会が変わってきて、市民が公共性を担うのだという、こういうことになってきている。

なぜそうなったのかというのはいろいろな要因がありますが、一言でいえば、成長が終わったということが大きいと思います。成長が終わったというのは、社会全体の富というものがこれ以上増えない。と同時に、人口も増えない。富も増えないし人口も増えない。国の財政も非常に逼迫してきているという状況があります。これは日本に限らず、今世界各国で同じような状況が出ていますから、ヨーロッパなどでも財政危機というのが言われるようになってきています。

ですから、社会がどんどん成長して、人口が増大し、富も上がってくるような時代

というのは、国の中にある種の正当性があって、そして、それをベースにして市民が国に対して色々な要求をし、それに国がこたえていくというような、こういう構図が可能であった。しかし、それが少子高齢化社会になり、人口が減っていく。富もそんなどんどん上がっていくという時代ではない。高度成長も終わった。今の大人たち世代というのは、一応自分たちは前の世代よりもより幸せになるというような希望というか夢みたいなものは何となくみんなに共有されていたわけですけども、今の子どもたちの世代というのは、そういう希望とか夢みたいなものは想定されるのが難しくなってきたというわけです。そうしますと、国が全部引き受けて市民に対して権利を保障していくという、こういうやり方で社会を回していくというのはなかなか難しくなってきたというわけです。なので、公共性を市民自身が担っていくという、市民が主人公の社会をつくっていくというようなそういう方向性をとることで難しい状況を突破していくということが、これが広い意味でシティズンシップ教育ということで行われていることの中心になっています。

そして、市民が公共性を担い、国に対しても、市場に対しても、そしてNPOのよ

うな非営利団体、もしかしたら明推協のようなものもこういうところに入ってくるのだと思うのですが、国会、市民団体、そしてマーケット、経済的な市場という、こういうものを市民が中心になって統制していくような社会にしていこう。国と市民が上下関係で対峙しているような社会から、市民が公共性を担い、市民が中心になって、国や市民団体や市場を統制していくような社会に転換していく。今ちょうどその転換期に位置しているという、そういう流れの中でシティズンシップ教育ということが欧米でも言われるようになってきているし、日本でも、総務省の中で政治的リテラシーとかシティズンシップ教育ということが言われ、昨年、内閣府でも、シティズンシップ教育ということが子ども・若者ビジョンの中で取り入れられるようになったということとを認識する必要があります。また、鳩山さんの昨年の所信表明演説で新しい公共という言葉が語られたのも、それは必ずしも鳩山さん自身の個人的な所信表明として言われているだけではなくて、2003年の中教審の中でも既に言われている。その意味でいえば、2000年代に入ってから新しい社会の動きの中でこういう言葉が出てきているというところを見ていく必要性があると思います。

これが新しい公共性ということで言われてきていることの内容になりますが、そういう流れの中で、明るい選挙推進運動のこれからということに関しては幾つかの具体的な提案がなされています。明推協の運動に關していうと、今までの明推協活動というのは、どちらかというと選挙啓発の中では選挙のルールに關する事柄の啓発であるとか、そもそも選挙に行くということを啓発するということはなされてきたと思いますけれども、それにプラスして公開討論会や政策討論会のようなものを推進していく、あるいはシンポジウムをやるのかいう、こういうところまで踏み込んだことをやっていったらどうか。

選挙のときだけ急に何か争点が出てきて、その場でムードに流されてということにならないためには常日頃から、エネルギー政策の問題でもいいですし、TPPの問題でもいいですし、消費税の問題でもいいですけれども、そういうことに関する政策討論会のようなものを開催して、例えば各政党の代表に参加してもらって、だれか司会者をつけてシンポジウムのようなものを開く、そして、こういう政治大学みたいな雰囲気の中で公開討論会をやるというようなことをやれば、常日頃から、争点というも

のを市民が自覚的に認識できるようになるだろうということです。そういうようなことが具体的に提案されています。

それから、特に、若い有権者の政治意識の向上ということが非常に重要な課題だと認識しています。年代別投票率を見ると一目瞭然で、大体20代と60代以上との間には3倍4倍ぐらいの開きがあるという投票率になっています。投票の質という、政治的リテラシーの問題もさることながら、そもそも政治に参加する投票率というところに関しても、若い世代は圧倒的に少ないわけなので、ここは何とかしなければいけない。今の若い人たちは、携帯とかパソコンでのインターネットを通じての情報のやりとりがすごく進んでいるようです。皆さんの中でもやっている方もおられるかもしれませんが、私が今話をしていること自体がツイッターとかで、今、こんなこと言っているぞみたいなのがリアルタイムでバツと広まるみたいです。そういうことというのは若い人たちは得意なので、インターネットで情報発信するという、そういうことをうまく形で使えば、若い有権者の政治に対する参加というのはもっと高まってくる可能性があるということです。

もう1つ、投票年齢に関しても、法制審の最終答申まで行っているのが、選挙権年齢を18歳に下げるという話です。これは国民投票法という法律が2、3年前に通りまして、その中で時限つきで関連法規についても議論すべし、ということが言われています。国民投票法というのは、日本国憲法を改正するための国民投票に関する手続法規でして、そこに投票年齢を18歳にするという規定があるので、それを前提にして、その関連法規である公職選挙法でも民法でもどっちも18歳に下げるという方向性が今出ています。本当はもっと早く民法も公選法も18歳になってもおかしくないのですが、政府の対応が遅れていてなかなか18歳にならないのですが、とにかく近い将来、18歳に成人年齢が下がるのだということです。そのことを前提にすると、ますます政治的な意識というものを若い有権者に対して求めていくことが必要になってきます。

最後に、学校教育の中でシティズンシップ教育を行うことで将来の有権者の意識を醸成していくということです。教育基本法の第14条第1項では、政治教育が重要だということ書かれています。政治教育が重要だということが書かれていながらも、それが政治的中立性という名のもとにやや抑制されてきて、学校現場ではなかなか

か政治教育をやりにくい状況がありました。しかし、先ほど来申し上げてきたように、論争的な課題というものを授業の中で、学校の中で扱うということが今まで以上に必要になってきていますので、教育基本法の第14条第1項を実質化していくことが必要であるということです。そのために、できれば学習指導要領の中に政治教育という項目を盛り込むような方向で制度改革をしていこうということが今議論されています。

それから、最近問題になっているのが生徒会長の選挙で、立候補者がなかなかいないということです。皆さんのころはどうだったでしょうか？私は昭和35年生まれなので、昭和48年とか49年ぐらいが中学生だったのですが、そのころから、だんだん生徒会長に立候補する人がいなくなってきたのです。私の2年3年上の先輩ぐらいまで、ちようどコクリコ坂の時代は、3人も4人も生徒会長に立候補して、公開討論会とかをやって、みんなで投票して生徒会長を選んでいた。中学校でも高校でもそういう時代がありました。今そういうことは、少なくなりました。どの学校でも、先生が指名して「お願いだから生徒会長になってくれ」と言わないと、生徒会長にならないというふうになってきているのです。これは、民主主義社会のこれからを考えると非常に

由々しい問題です。生徒会長選挙に立候補するということが何か恥ずかしいことだとかそういう意識がどうしてもあり、選挙に立候補するということが余りいいことではないようなイメージを持ったまま、学校を卒業してしまふ、選挙とか民主主義というものに対するイメージも、余りよくないまま大人になってしまふということになってしまふので、一昔前の私の先輩ぐらいの世代までというのは、先ほども言ったように、3人も4人も立候補して、みんなで政策討論会をやつて、生徒もそういうのを聞きながら投票していた時代というのは、そういう人たちが大人になれば、民主主義というものも、そういう人たちによつて動かされていくので政治も活性化していたと思うのですが、今の子どもたちはなかなかそういうふうになっていません。なので、生徒会長の選挙などをしっかり支援していくこと。これは何よりもまず、明推協がやるよりも、学校の先生がしっかりやったほうがいいわけですから、学校の先生がこういうことをやるためにも、それを支援する必要があるということです。それからもう一つ、未成年模擬投票というものもあります。これは既に幾つかの中学校や高校では行われていますが、統一地方選挙とか総選挙とか参議院選挙に合わせて学校で模擬選挙

をやるのです。子どもたち自身が大人になったつもりで、実際に地域で立候補している知事の候補とか市長の候補とか、あるいは政党に投票するのです。そういうことを体験してみること、選挙というのはこういうものなんだとか、どの政党がどういう主張をしているんだとか、マニフェストというのはこういうものなんだ、ということを通して、争点というのはこういうことなんだなという、その時々で選挙で何が争われているのかということを読んでいくことが結構役に立つのではないかということが言われています。

そういう生徒会長選挙の支援とか未成年模擬選挙の推進、あるいは子ども議会の普及・促進とか、そして学習指導要領に政治教育を盛り込むというようなことを今、私も参加している常時啓発活動のあり方研究会では議論しています。この1月ぐらいには最終報告が出ますので、皆さんにも是非そういうのもご覧になっていただきなながら、これからの政治教育のあり方について一緒に考えていければと思っています。

今日の私の話はそんなところで締めくくらせていただきますと思います。どうも長い時間御清聴ありがとうございました。（拍手）

参加するとはどういうことか？（哲学カフェ）

鹿児島哲学カフェ

能瀬 博之

鮫島 志保

平成23年12月3日 於 三重県津市

能瀬 皆さん、こんにちは。

一同 こんにちは。

能瀬 これから約2時間半お時間いただきまして、皆さんに哲学カフェを体験していただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

突然なんです、皆さん、ちょっと、目を閉じていただいてよろしいでしょうか。

鮫島 哲学カフェで行うことは、ただ話し合いです。1つのテーマについて、自分の思うことを自分の意見として発表する、ほかの参加者の意見もちゃんと聞く。違うな、

と思つたら、わからない、と思つたら、率直にそれを伝える。ですから、哲学の勉強会ではありません。講演会でもありません。参加して頭がよくなるわけでもありません。自分の頭のよさを見せる場でもありません。話し合うことに意味があるかどうかもわかりません。議論がうまくなるとも思えません。そもそも、議論に勝つことが目的の会ではありません。思想信条をだれかに植えつける場でもありません。目的はただ1つ、私を含む参加者1人1人が自分の考えをちよつとでも深められる場にしたいのです。

能瀬 それでは、目をあけてください。まずは簡単に自己紹介をさせていただきますと思います。私たちは、鹿児島哲学カフェの鮫島志保と能瀬博之と申します。まず、こちらの鮫島志保なんですけれども、趣味は読書とフィギュアスケート鑑賞というところで、この2つのことを話させると時間がいくらあつても足りないくらいしゃべりますので、気をつけてください。

鮫島 気をつけてくださいね。

能瀬 今、読書が趣味と申し上げたんですけれども、鹿児島で天文館というところで

「てんどく」というイベント、読書会を開催していて、そちらの運営にも携わっております。ちょうど1週間前に作家の方を招いて開催したときも進行されたんですね。

鮫島 そうですね、はい。

能瀬 私は能瀬博之と申します。鹿児島県で高齢化率ナンバーワンのさつま町というところから参りました。住んでいるのは始良町というところなんですけれども、さつま町という町で医療福祉グループのサラリーマンをしています。で、趣味は、マラソン、献血、観劇です。献血すると、献血カードにその県の名前が入るので、ぜひ全国分集めようと、今回もなかなか来る機会のない三重に招いていただいたので、献血して帰ろうと思います。それから、フェイスブックに息子の写真をアップすることにはまっています。フェイスブックで私の名前を検索していただくと、毎日、うざいぐらいに息子の写真がアップされていますので、是非ご覧いただければと思います。

鮫島 これは完全に親ばかですね。

能瀬 はい、ということで、私たちの紹介はこの程度にしておいて、大体どんな人間なのかわかっていただけましたでしょうか？——はい、わかっていただいたところで、

哲学カフェの説明に入らせていただきたいと思います。では早速なんですけれども、皆さんの中で哲学カフェに参加したことのある方っていらっしゃいます？　いらっしゃらないですよ。皆さんは、哲学と聞いて、何をイメージされますかね？

参加者 社会の倫理。

能瀬 なるほど社会の倫理。他の方はいかがでしょうか。いかがですか。

参加者 人生の哲学。

能瀬 人生の哲学。社会の倫理。人生の哲学。じゃあ最後にあなたは？

参加者 ギリシャ。

能瀬 ギリシャ。はい。社会の倫理、人生の哲学、ギリシャ、というふうに、今、御意見いただいたのですけれども、何となく難しいイメージじゃないですかね。哲学って簡単だと思ってる方、いらっしゃいますか。いらっしゃらないですよ。ちよっと難しいイメージですよ。

哲学は、哲学者がするもの、もしくは大学でするもの、というイメージをお持ちの方が多くと思います。が、哲学カフェとは、日常の中で私たちが抱く疑問を、対話するという手法で、哲学的に考えてみようとするものです。例えば、皆さん、愛とは何

か。死ぬこととは、生きることとはどういうことか、なんてふっと思ったことありませんか？哲学カフェは、そういった根源的なテーマについて、問いについて語り合う場です。哲学カフェというのはフランスで、マルク・ソーテという哲学者によって考案されて、今、いろんな国に広まっています。日本でも2001年から、主に大阪とか東京とか都市圏中心に開催されています。

では、どんなことをするのか。――哲学カフェには決まった定義はありません。えっ？と思った方もいらっしゃるのではないかと思うのですけれども、哲学カフェには決まった定義はありません。なので、主催者や進行役によって雰囲気が変わります。徹底討論する、じっくり対話を進める、その場でテーマを募る、進行役がテーマを提示する。哲学の知識、歴史の知識をフル活用する。日常経験を生かす、など、本当にさまざまなスタイルで行われています。

ただ、共通している点がございまして、まず1つ目、進行役がいて、これをファシリテーターと言いますけれども、そのファシリテーターがいて、あるテーマについて対話をする。それが哲学カフェです。

先ほどからしつこく『対話』と申し上げているのですけれども、対話というのはお互いの意見の不備とか矛盾点を指摘し合うのではなくて、相手を言い負かすのでもなくて、相手の意見を聞いて、尊重し合いながら進めていくものです。

では、具体的にどういったテーマが全国各地の哲学カフェで行われているか。例を挙げますと、「何のために生きるのか」、「死刑制度の必要性」、「なぜ、子供にサンタがいると嘘をつくのかわかるのか」。あれってなんで嘘つくんですかね？そういうものとか、「不謹慎とは何か」、「あなたは1人で生きていきますか」、「なぜ結婚するのか」、「これが夢でないとなぜわかるのですか」等々、身近なものからちよつと難しいものまで、さまざまなものが行われています。

先ほど、日本でも行われていると申し上げましたが、現在、日本でどれぐらい哲学カフェが、どれぐらいの場所で哲学カフェが開催されていると思いますか？

参加者 100ぐらい。

能瀬 はい、ありがとうございます。100ぐらい。そちらいかがですか？

参加者 50？

能瀬 結構多いと見せかけて、実は意外と少ないんですね。今、20カ所以上で哲学カフェが開催されています。一番有名なのは『CAFE PHILO』（カフェフィロ）という団体とか『関東実験哲学カフェ』だとかが中心となっていて行われています。最南端は僕らの鹿児島哲学カフェです。実はここ三重県でも『いせ哲学カフェ』というのが行われているのですが、なんで、今日鹿児島からわざわざ来たか、という話は後ほどお話しさせていただきます。

次に私たち鹿児島哲学カフェについて御説明いたします。鹿児島哲学カフェは、23年2月に発足しまして、4月に第1回を開催しました。開催の経緯といたしましては、私は大学時代に哲学カフェの運営に携わっていたのですけれども、社会人になって6年目、自分の会社の研修でファシリテーションの研修を受けまして、そのとき、ふと、久しぶりに哲学カフェしたいなあ、と思いついて、ツイッターで「哲学カフェしてえな」ってつぶやいたんですね。そしたら、鯨島さんが、「私もしたい」って言うてきて、それがきっかけで、とんとん拍子で始まったところでございます。

4月に第1回を開催いたしましたして、本日現在、8回開催し、延べ119名の参加を

いただいております。この8回の中に、10月1日でしたかね、鹿児島で開催された明るい選挙推進協会主催の若者リーダーフォーラムでも哲学カフェをさせていただいて、そのときの反応がきつとよかったんですね（笑）、その御縁で本日もこちらに、御招待いただきまして、この機会をいただいております。

鮫島 ありがとうございます。

能瀬 運営しているのは、他の哲学カフェというのは大学院生だったりとか、あと、哲学者——それも大学関係者なんですけどね、そういった方が中心にやっていらつしやるんですけれども、私たちは、一応、大学時代に哲学科、教育哲学所属ではあったんですけれども、今はもう完全な素人ですので、運営しているのは本当に普通のサラリーマンです。

先ほどのような哲学カフェ、運営スタイルがあるという話をしたのですけれども、私たちはど素人なので、哲学の知識は余り活用しません。できるだけ、本当に一般の方々が参加しやすいように、雰囲気づくりを心がけて運営しております。

参加者はサラリーマン、主婦とか、学校の教員、理系の技術者——こういうの、文

系の方が好きそうですね。でも理系の技術者、あと、公務員の方、NPO職員など、下は20代から一番上は70代まで、幅広く参加していただいております。

今までのテーマとして、「ととは何か?」、「あなたはいましあわせですか?」、「豊かさはどこへ向かうのか?」、「つながりの可能性」、あと、ここ2回は仕事をテーマにしたものだとか、12月には、ある映画を見て、その後、その映画について哲学的に語り合うという企画も予定しております。

哲学カフェの説明はこの辺にしておいて、これから実際に皆さんに哲学カフェを体験していただこうと思うのですが、その前に、先ほど決まったルールないと申し上げたのですが、あくまでも今日の哲学カフェにおけるルールを、ここで申し上げておきたいと思います。

まず1つ目ですね。『主役は皆さんの発言です』。皆さんの発言をもとに対話が展開されますので、思ったことをどんどん発言してください。そういった皆さんの発言をもとに展開していきますので、どんどん、好きなように発言してください。

先ほど申し上げたとおり、私はあくまで進行役です。ですので、皆さんに哲学的な

何かを教えるわけではございません。皆さんが対話を通じて考えるお手伝いをするだけなので、皆さんの発言がなければ、今日の哲学カフェは進んでいきませんので、その点をしっかり覚えておいていただきたいと。

2つ目、『話すときは簡潔に、聞くときは最後まで』。他の人が話すのは最後までちゃんと聞いてください。途中で、「何言つてんだ、こいつ」と思うことがあるかもしれませんが、それは質問したいことも、とりあえず最後まで聞いていただいて、聞いた上で質問してください。質問することは全然構いません。反論するのも全然構いませんけれども、1度すべて聞いていただいてから発言してください。聞くときは最後まで、とは言いますけれども、そうすると、本当にすごく1人でしゃべる人がいたら、聞く側もストレスがたまりますので、話す時にも注意していただきたい。話す側も簡潔に。皆さんがわかるような言葉で、できる限り短く簡潔に発言していただきたいと思います。でも、今私が「聞くときは最後まで聞いてください」と申し上げたので、途中で「やめて」とはなかなか言えないと思います。もし、余りにも長くなつて方がいらっしゃったら、私が止めさせていただく場合がありますので、その点は御了承いただきたいと思います。

最後に、3番目、『わからない点は素直に率直に聞いてください』。これは一番大事なことなんですけれども、私も含めて、日本人というのは、結構、相手に気を遣ったりだとか、周りの雰囲気、要は空気読んだりして、これ言ったら恥ずかしいからとか、あと、自分が発言したことに、強いことを言われて、答えに窮したらどうしようと思つて、言えないことつて多いと思うんですね。今日はそういったのは忘れていただいて、どんどん質問とか、わからないことはどんどん聞いて、どんどん発言していただきたいと思います。

鯨島 もう、「それって、どういうことですかーっ？」っていう感じで、素直に聞いて、わかったふりをせずに、そこで立ちどまつて考えることつて、とっても意味があると思うので、素直に聞いていただければと思います。

能瀬 さて、ルールを確認したところで、哲学カフェに入る前に、ウォーミングアップをします。まず、机の上に出ている物をすべてカバンに入れていただけますか。そして机の上に何もなくなつた方から、机をすべて端に寄せてください。——はい、よろしいですかね。通常の哲学カフェでは、こういうアイスブレイクは行わないのです

けれども、私も含め、皆さん、固くなっておりますので、ちょっとアイスブレイク的なゲームをしたいと思います。

今ここに32名位いらつしやると思うので、8人グループを4つ作ってください。やり方はこだわりませんので、できるだけ知らない人と組んでください。知っている同士は離れてください。8人グループ作ってください。——はい、ありがとうございます。じゃあ、できるだけ広くなってください。広まってください。4つのグループに分かれていただいたところで、ああ、分かれたら、手をつないで、円陣つくってください。はい、つなぎましたね。それでは皆さん目を閉じてください。よろしいですか。今から、私がある形、例えば、四角だとか、丸だとか、星はさすがに言いませんけれども、そういった形を言いますので、絶対に目を開けずに、その形を作ってください。その際、声は出していただいて構いません。例えば「僕の右の人が角でー」とか言うていただいて構いませんので、声は出してもいいですけど、絶対に目はあけないでください。よろしいですね。で、できたと思ったら、グループの全員で、「できた」と叫んでください。4つのグループがそろった段階で、私が指示しますので、そのとき

に目をあけてください。時間を計りますので、4グループの中で1番になるように、ぜひ、頑張っていたきたいと思います。よろしいですか。それではいきます。「正方形」。

（各グループ 正方形作成中）

能瀬 はい、ありがとうございます。それでは、目をあけてください。

まずは1番目にできたグループから見えていきましょか。1番目、59秒。速かったですね。これは正方形になってますか？やや微妙ですね。

次は、2番目。そちらのチーム。

鮫島 2番目は1分20秒でした。

能瀬 これはなんか正方形ができている気もします。よくここまで、きっちり寄りましたね。これは、正方形ですね。3点ぐらいあげてもいいぐらい、正方形ですね。

じゃ、3番目、こちらはいかがですか。

鮫島 3番目は、1分25秒。

能瀬 僅差ですね。ああ、どうですか。微妙ですか。おお、この角だけ90度ですね。

で、4つ目、いかがですか。

鮫島 4つ目、1分26秒。

能瀬 ここも1秒差。これは、ほぼ丸に近いですね。ちょっと難しかったですね。

じゃあ、せっかくなので、チーム、変えましょうか。もう1回だけやります。今度は16人1グループをつくってください。

鮫島 2つに分かれるということですね。

能瀬 用意、スタート。——はい、わかりましたね。では、2回戦目やります。手をつないでください。目をつむってください。

鮫島 また時間を計りますね。

能瀬 じゃあ、台形でいきましょうか。台形です。どうぞ。

(各グループ 台形作居中)

鮫島 はい、時間です。

能瀬 せっかくなので、みんなで「できた」と言いましょか。せえの。

一同 できたー。

能瀬 はい、では、目を開けてみてください。こちらはこういうふうにして台形をつ

くろうとしたんですか。

参加者 まず、底辺1人、僕が真ん中で、そこから、角をつくっていった。

鮫島 台形ですね。

能瀬 ちゃんと台形が出来てますね。

鮫島 素敵ですね。

能瀬 では、こちらのグループは、どういうふうに出形つくろうとしたんでしょう？

参加者 正方形は台形なので、正方形つくろうとしたんです。平行が難しいので、角の人を決めて、角の人のところで90度をつくろうとしました。

鮫島 もう少しで、できそうだったというところでしたね。

能瀬 正方形は台形なので、正方形をつくろうとしたそうです。

鮫島 哲学的ですね。

能瀬 ということで、皆さん、体と頭は暖まりました？よろしいですかね。それでは皆さん、今度は自分のいすを持って、まん中あたりに集まってください。形は気にしなくていいです。こっち向いて座ってください。形は後から指定します。

それでは皆さん、笑顔も出てきたところで、哲学カフェに入っていきたいと思うのですが、本格的に入る前に、まずは対話の練習をしたいと思います。

先ほど、聞くこと、相手の話を聞くことを重視してくださいという話をしたのですけれども、「聞く」というのは、そのまま言うことを聞くということもありますし、哲学なので、問いかけ、質問、というもので対話というのは成り立っています。今から対話、質問、そういったものの練習をしていきたいと思います。

まず、今からどういったことをするのか、私たちがやってみたいと思います。今から6名ずつに分かれて練習するので、私と鯨島の2人と、前の4名のかた、お手伝いをお願いします。今からこのように6名に分かれてもらいます。最終的には全体で哲学カフェをやるんですけども、まずは練習で6名程度分かれてやります。それではこの6名の中で、代表者を決めてください。その代表の人は、今から私が言うテーマについて、何か、何でもいいです、考えていることを話してください。それについて、他の方々は何か質問をして、聞いて、それを深めてください。とにかく気になることとか、何か質問してください。その反対意見でもいいですし、とにかく何か、その

人がしゃべっていることに對して質問などをしてください。そして、また、その代表の方はその発言をもとに、何かしゃべってください。それをまずは10分とりますので、それを繰り返します。いいですか。

ではちょっと、今から見本ということで行いますね。じゃ、そちらの方、代表をお願いしますね。

能瀬 それでは、幸せって何ですかね。

代表者 僕の幸せは、飲み会でワイワイすることかなって思います。お酒の席では、周りの人との話題も盛り上がりますし、ざくばんな話もできるので、幸せな感じがします。

能瀬 誰か質問ないですか。質問してあげてください。

参加者 月にどれぐらい飲みに行かれるんですか。

代表者 最近は週1から週2程度行きます。

能瀬 その週1から週2ってことは月8回行かれているんですね。そのお金はどこから出ているんですか。

代表者 お金はアルバイトしてるので、そこから出したり、ちよつと親に「飲み会あるんだけど…」と言つて、すねをかじりながらです。

参加者 ちなみにどれぐらい、すね、かじっているんですか。

代表者 1万円くらいです。

能瀬 飲み会でワイワイすることは確かに楽しいんですけども、なんで、幸せという言葉とそこが結びつくのかな、というのが不思議なんですけど。

代表者 飲み会だとフランクに話もできて、より相手のことを知ることができて親睦も深まりますし、そういった意味で幸せが感じられます。

能瀬 と、こんな感じで、今は話す人にマイクを回して、順繰り順繰り質問していきますけれども、こういうふうになくていいです。質問がなければ、全然黙っていてもいいです。その代わり、質問とかがある人は、どんどんしゃべってください。他に言いたいことがある人がいたら、どんどん答えてください。皆さんはマイク持たないので、どんどん質問してください。どんどん答えてください。余り自分のことを隠さないで、どんどんさらけ出して話していただければ、物事の本質、例えば、なぜ彼

がこんなにも飲み会が楽しいのか、じゃあ1人でいるときは幸せじゃないのか、とか、そういうところが見えてくると思います。よろしいですか。大体、わかりましたかね。いいですか。

では、同じコミュニティの人が余り多くなるとつまらないので、なるべく知らない人同士でグループを作ってください。そしたら、その中から代表者を決めてください。どんな方法でもいいです。じゃんけんでもいいです。立候補でもいいです。今日が誕生日の人でもいいです。——決まりました？大丈夫ですね。

では今から、その代表者の人は、今度は「愛について」で話してください。いいですか。皆さんはどんどん質問してくださいね。根掘り葉掘り。代表の方が考える愛というものの深みを探ってください。よろしいですか。どんどん質問してください。それでは、今から10分間お願いします。別に後からその代表の方の愛について発表とかさせませんので、気軽に話ししていただければと思います。ではスタート。

（各グループ 話し中）

能瀬 はい、お疲れさまでした。いかがでしたかね。ちよっと疲れました？なかなか

難しいですよ。ちょっとここで5分間だけ休憩とりたいと思います。で、5分経ちましたら、今度はいすを扇形に並べて、余り知っている人同士が固まらずに座っていただきたいと思います。よろしいですかね。では、5分間、休憩はいます。

（休憩）

能瀬 それでは、哲学カフェを始めたいと思います。今日のテーマは、『参加するとはどういうことか』です。はじめに、皆さん、先程練習でグループで対話しましたよね。その対話について、どなたか3名程、感想を聞きたいのですけれども。

参加者 感想なんです、今までこんなに短い時間で深く考えることがなかったのと、一つの話題からいろいろ派生していったって、考えることって楽しいと感じました。

能瀬 ありがとうございます。そのほかの方、何か別の意見の方、いらっしゃいますか？代表者をやられた方はどうですか？

参加者 今まで愛についてここまでしゃべることがなかったんで、一方的に聞かれる立場になったのは、すごく良かったです。皆さんの意見を聞きたいけれども、どうしてこんなにつけてくらい聞かれ続ける状態だったので、もっとほかの人の意見を聞き

たいなと思いました。

能瀬 ありがとうございます。もう1人どなたか。——じゃあ、この中で、先ほど一言も発言できなかったって方、いらっしゃいます？あ、いましたね。

参加者 みんな、結構、鋭くボンボン言ってて、それを聞いてるだけでお腹いっぱいでした。愛っていう1つのテーマでしゃべる人と質問する人という形で、みんな、ほとんど感想を言っていって、こうやっていけば、どんどん深まっていくんだなというふうには感じました。

能瀬 ありがとうございます。今、3名の方の感想を聞いたんですけれども、今の方のように結構楽しかった、という方もいらっしゃれば、最後にはモヤモヤとしたまままで終わる方もいらっしゃると思います。また、発言しなかったのにできなかったという方もいらっしゃると思います。基本的に哲学カフェというのは、参加しても、発言は別に強制するものじゃないんですね。別にしゃべりたい人がしゃべって、人の意見を聞きたいって人が聞くっていうことで参加しているんです。鹿児島哲学カフェでも、開始からずっと最後の5分前ぐらいまで黙っていた人が、最後に言った一言が

核心ついていたりということが結構あるんですね。そういったこともあるので、特に今日は「皆さん、絶対に一言ずつはしゃべってください」とはこの時点では言いません。でも今日のテーマは「参加するとはどういうことか」なので、ぜひ「参加してください」。いいですか？今から哲学カフェをしますけれども、そこに参加することとはどういうことなのか。「発言してください」とは言いません。「参加してください」。よろしいですか。どういうことですか、と聞かれても、どういうことかは、人によって違うので、自分なりに考えて参加してください。

では、対話のスタートとして、まずは先ほどの小グループでの対話に参加するということはどういうことなのか、というのを考えてみたいと思います。

先ほどのお1人だけですかね、他にも、全然発言できなかったという方いらっしゃるたら、手を挙げてください。——やはり発言できなかったのはさっきの方だけのようですね。もちろんこれがいけないとか、いけないとかいう問題ではありません。善悪の価値は抜いてください。そうではなく、この方は先ほどの対話に参加していたんでしょうか？どなたか、意見のある方、手を挙げてください。——じゃあ、参

加してたと思う方、手を挙げてください。はい。

参加者 僕は参加していたと思います。理由は、誰かが意見を言って、それを聞いているという段階で、既に自分の中でも考えるということをしていると思うので、彼は参加していると思います。

能瀬 ありがとうございます。人の意見を聞いているので、参加していると思う。もう1人ぐらい、お願いします。

参加者 彼が参加していると私が感じた理由ですが、話を聞きながらうなずいていたので、リアクションがあったという点において、参加していたのではないかと考えました。

能瀬 話を聞いていたから、参加していると思う。話に対してリアクションをとっていたから参加していたと思う。では今度は参加してなかったと思う理由をお願いします。

参加者 誰か1人が話して、それを聞くだけの講演会だったら、参加したことになると思うんですけど、みんなで討論をするという形の状態で何も言わないというのは参

加してないことになるんじゃないかなと思います。

能瀬 はい、何かお互いに反対意見不是吗。例えば、先ほどのお2人が言ったことに対して反対の人。または今おっしゃったことに対して、反対意見とか質問とか。どんどん質問しましょう。どうですか。

参加者 じゃあ質問します。意見を言えなかったのは何か理由があるんですか。それとも、何か意見を言おうと思ったら、先に言われてしまったとか、そういうことですか？

参加者 別に意見を言う必要もないかなと。というのは、哲学カフェの必要条件として、全員が発言しなければいけないとか、ディスカッションしなければいけないとか、そういう全員が話さなきゃいけないよという条件があるならば絶対発言しなきゃいけないと思うんですけど。今の共通の条件としては、質問しなくてもいい、聞いてもいいし、発言権はあっても強制ではないので、人の意見を聞いて、ああそうだなとかは思えたので、別に発言しなくてもいいんじゃないかなと感じました。

能瀬 どうぞ、どんどんしゃべりましょう。

参加者 人の話を聞いてみると、疑問点とか浮かんでくるかなと思うんですけど、そういうのはなかったんですか。

参加者 さっきの場合は、愛というテーマでやっていて、人それぞれの価値観があるはずなので、疑問というよりは、そういう価値観もあるだろうなというふうに、飲み込めて、もし、テーマが、みんなが同じような一定の価値観を持っていることに対して、自分と違う意見が出た場合に、疑問が起これば、それは聞きます。でも、さっきの場面では、違うな、というよりは、新しい価値観として、ああそうなんだ、という飲み込みができたので、ということなんです。

能瀬 発言に間があくのは、気にしないでくださいね。皆さん、この話題を真剣に考えていると認識していますので、別に間があいて、私がかわいそうだからといって無理に手を挙げなくていいですからね。間も、ちゃんと考えているんだと認識していますから。はい、どうぞ。

参加者 じゃあ、あ、そうなんだな、と思ったとして、その以外に、言わなかったけどそれに対しての意見というのは生まれたんですか？

参加者 やっぱり自分と違う価値観というか、それぞれ意見があるので、そうだろうなと思って、自分の中で、そうなんだ、という処理ができたということです。なので、まあ、言わなくてもいいか、という感じになりました。参加条件として発言というのがあれば、発言したと思うんですけど。

参加者 僕は、ただいるだけ、というのと参加するでは違うと思うんです。彼の場合は、先ほど発言できなかったという質問に対してちゃんと意見を言ったということは、やっぱりその場でみんなと一緒にテーマを共有して同じことを考えていたという証拠だと思うので、参加してたということになります。やっぱり、自分の得意なテーマとか苦手なテーマ、ふだん余り考えていなかったテーマとかになると発言ができなかったりしてしまうこともあると思うので、そういう意味では、その場を共有しているという意味では参加していると言ってもいいんじゃないかなと思います。

能瀬 価値観、それから人が発言したのを聞いて共有してたから、その場にいたけど、何も考えてなかったわけではないから参加してた、と考える人が多いんですね。それ以外の方っていらっしやいませんか——はい、どうぞ。

参加者 頑張って代表の方が話してくださっているのです、気を遣って沈黙にならないようにしてあげることも大事なのではないかというふうに思います。だから、それをする事によって参加するとみなすべきなのかなと思います。

能瀬 つまり、彼は参加してない？

参加者 してない。

能瀬 なるほど、彼は参加してないと。してない派が1人増えましたね。その他に、意見が変わって、彼は参加してないと思う方っていらっしゃるかもしれませんか。はい。

参加者 さっきは参加しているほうに手を挙げたんですけど、やっぱり参加してないと思いました。その理由なんですけど、「参加する」の定義はやっぱり意思を表明するということかなと思うので、そう考えると彼は参加してないのではないかと思います。

能瀬 自分の意思を表明していなかったから、参加していなかった。はい。

参加者 うなずきも一種の意思表示だと思うのですから、彼が発言してないとしても、うなずいていたということなので、それは意思表示してたんじゃないですか？

参加者 言い方が悪かったんですけど、参加するの定義として、自分の意思を表明する。つまり、自分の意見を言う、ということが参加していると僕は考えます。

参加者 でも、他の人の意見に対して自分もそう思うから、うんうんとうなづくというんじゃないですか。そういう意味では自分の意思も表示していると思いませんか？

参加者 それは君の定義なので、僕自身の定義としては、繰り返しになりますけど、話している人の話を聞いて、もし何かがあれば質問するし、なければ、自分の中で理解している、ということですよ。それに、これも繰り返しますけど、さっき説明してもらったのは、発言するのは強制ではないということ、もし、そこで発言するのが必須であれば、参加するということは発言する、自分の意思を表明するっていうことだったんです。でも、そんな説明がなかったの、自分の中の定義としては、話を聞いて理解して、何かあれば発言すればいいということでした。あと、疑問に思うことが特になかったの、ああそうなんだ、というリアクションをとったのは自分の意思表示のつもりです。

参加者 1つだけ気になったんですけど。本人としては参加したと思っているんでしょうか？それとも参加していなかったと思いますか？

参加者 自分としては参加したんじゃないかなと思ってます。話の内容も聞いているし、話も理解したし。誰がこういうことを言って、どういう答えを出したのか、理解して、聞いていたので、参加したって言えるんじゃないかなっていうふうには自分では思っています。

能瀬 はい、ちよつとここまでで、いったん整理をしたいと思うんですけども。

発言していなかったけど参加していると考える人の理由としては、本人としては、ある一定のルールに基づいて、その中で「参加していない」というルールを満たしていないから参加している、という意見。それから、誰かの話に対して考えて、意思表示をしているから、参加しているという方。

逆に、参加してなかったというのは、そもそも、みんなが発言している中で、1人だけ発言していないから、参加していなかった、という意見。それから、発言が意思表示だから、その意思表示がなされていないから参加していない、という意見だった

と思います。

じゃあ、逆に、発言していれば、それは参加したことになるんでしょうか？先ほどなたかが、空気を読んで何か質問してあげることも参加していることになるんじゃないか、とおっしゃっていましたけれども。例えば、ただ空気を読んで、何も考えないで発言をした方と、すごい何か考えている、相手の発言に対して何かすごく考えているけど、何も発言していない方、というのは、その参加のルールとして、必ず発言すること、ということが、まずあったとしたら、その発言しなかったという人は参加していないことになるんでしょうか？一方は、何も考えてないけれども、空気を読んで、何でもいいから適当な言葉を発言する。一方、すごい考えているんだけど、発言はしなかった。うなずきはしている。どっちが参加しているのかな、という話です。皆さん、どうでしょう。どう思います？どっちでもいいので、御自分の意見を聞かせてください。

参加者 参加するというのは2つのパターンがあるのかなと思います。低い参加すると、高い参加する、というのがあるのかなと。何も考えずに言うっていうのは低い

参加だと思っていて、高い参加というのは、自分の中で自分なりにきちんと理解して同調してうなずいている状況とかで、そういうときは、考えているだけでも参加しているかなと思います。なので、発言してても、適当に考えて上辺だけで言ってるのは、それは参加とは僕は言えないと思います。

能瀬 つまり？今の2パターンでいくと。

参加者 えっと、参加して、うなずいてはいらっしゃるんで…、参加しているに近いですが…、やっぱり僕の中では参加していないんですかね。

能瀬 じゃあどちらも参加していない？

参加者 はい。どちらも参加していない。

能瀬 ほかの方、どうですか。その場に2人ともいるんです。その場に2人ともいて、片や、何にも発言はしないけど、何か考えている人。それから、うなずいていても、何も考えていない人——たまにいますよね、相づちを打ってても、こいつ何も考えてねえなという人。そういった方いるので、何か考えてはいるんだけど、それが何も見えない人と、何かしゃべっているんだけど、何も考えていない人。彼の中で

は、どちらも参加していない。はい。その他の意見の方、いらっしゃいませんか。

参加者 僕は考えている、考えていない、じゃなしに、その場でいること自体が参加しているというふうに考えます。

能瀬 じゃ、つまり、2人とも参加しているわけですね。どちらも参加している。はい、他の方はいかがです？

参加者 すみません。ちよつとずれてしまうんですけども、参加する、の字の中に「加わる」という字が入っているの、いるだけではだめなんじゃないかな、というふうに私は考えます。だから来るだけじゃなく、来て、さらに加わろうという意思が何かしらの形で見えないと参加とは言えないんじゃないかなと思います。

参加者 私は、状況がちよつと違うんですけど、例えば、お祭りに行つて、法被を着て、写真に写っているだけで実際に何もしていない人でも、その人は写真を見た人には参加していると思われるわけだと思うんですね。なので、その人が何かしなくても、その人が参加したという意欲があれば、参加していると思います。

能瀬 参加したという意欲があれば。

参加者 私もさっきの発言と似ているんですけど、別の例で、東北にボランティアに行くとして、同じく行っても、すごいできる人と、ちょっと体力に自信がないから簡単なことしかできない、というのと似ているんじゃないかなと思うので、結局、参加しているんだと、私は思います。

能瀬 2人とも参加している、ということですよ、はい。2人とも参加しているという方の意見が多いようですが。そうではない方いらっしゃるじゃないですか？片方だけ参加している。両方参加している、両方参加している方、いらっしゃるかもしれません。いかがですか？

参加者 ということは、その場にいれば発言しなくても、何も考えてなくても参加しているということになりますか？

参加者 この場合はちよつと違うかもしれませんが、私が言った例は、東北のボランティアで、やっぱりみんながその場に行つて、少しでも何か力になりたいという気持ちがあったので、そういうのを含めると、ここにいて、班に分かれて、話をしている、聞いているというのでも、参加しているのだと私は思います。

能瀬 やっぱり気持ち、先ほど、意欲っていう話がありましたけど、気持ちが大事。気持ちさえあればいい。

参加者 多分、参加できているか、できていないかは、その所属している組織の目的が達成されたか、されてないか、じゃないかなと思います。というのは、例えば、いるだけで、何もしゃべらなくても、それで話がうまくいって、その問題が解決されれば、多分その人がもしそこにいなかったら、そのバランスがとれてなかったかもしれないし、逆に何も考えないでしゃべる人がいて、でも、それがうまく潤滑油になって、それが解決できたとしたら、それはそれでよかったのかなと。結果から見れば、わかるのかなと。

能瀬 結果が大事。なるほど。意欲が大事、気持ちが大事、そして結果が大事。

参加者 何に参加するかっていうので考えて、今日の哲学カフェっていうことだとすると、さっきもルールが、という話があったんですけど、何にしゃべらずに、モヤモヤとして帰ってもいいんです、ということだったので、そういう意味では別に、モヤモヤとして聞いていただけても参加しているんじゃないかな、と思います。こ

れが例えば、選挙とかだったら、投票しないと参加したことにはならない、いくら考えていても、とは、ことになるのかなという気がします。

能瀬 選挙とかだったら、何か考えていても、投票しなければ意味がない。それは参加していないということですね。

参加者 場合によってだとは思いますが、みんなが参加していると思う基準と、本人が俺は参加しているんだという基準がもともと違うと私は思います。うまく言えないんですけど、参加することの定義っていうのは、参加するっていうことに対する考え方が、人によって、例えば、発言をすることが参加するということだと思う人もいれば、考えるということが参加することだと思う人もいると思うんですけど、その自分が思っている定義みたいなものに、自分がとった行動が当てはまっているかどうか、ということ、だと思えます。つまり、発言をしたということに定義を置く人が、発言をしなかったら、自分は発言してないから参加できなかったんだって、すごく思うと思うし、逆に、思慮を深めることに定義を置く人だったら、十分参加したという満足できると思うので、私は参加するということは、そういうことだと思えます。

能瀬 自分が参加しているという意識、要は自分の定義を満たしているということは、参加していると自分が思っていれば、参加している、ということですよ。はい、ありがとうございます。

参加者 何も考えてないけど、何か発言したら参加したことになるんですか？という話がありましたけど、何か考えているかどうかは本人しかわからないので、それは本人としては何かを考えて、考え抜いた結果が的外れな意見になってしまったということも考えられるので、周りの人が参加したかどうかを判断するっていう部分では、本人さんが考えているか、考えていないかは本人しかわからないので、周りの人が判断するとしたら、それはやっぱり参加していることになるんじゃないかなと。本人が参加しているか、してないかっていうのは、それは自分次第ですけど。

能瀬 じゃあ、その本人が参加しているか、いないかの意思表示にかかわらず、周りの人が参加していると判断していれば、その人は参加しているということで、今の発言よろしいですかね。ということは、たとえばさっきの彼の話すると、皆さんは1人を除いて参加していると思っていいたわけだから、この場合だと彼は参加していたというこ

とになる。じゃあ、自分が参加していると思う基準と、周りが参加していると思う基準って、どういう点が似ているんですかね。共通点があるんですか、全く別ものなんですか。基準があれば、本人も周りもその基準にのっとって、参加を表明するんでしょうね。例えば、今日のこのグリーンエイジミーティングへの参加で考えると、皆さん、参加しているかっていったら、参加していますよね。参加者ですよ。それはなんで？なぜでしょう？この場所にいるから？参加者募集というのを見て応募したから？じゃ、さっきの話に似てきますけど、参加者募集というのに自分で出たいと思って意欲があって参加して、先ほどの事例発表中も身を乗り出して聞いていて、哲学カフェの時も1人ですごいしゃべっている人がいたと。そういう人と、誰かから誘われて、興味ないんだけど来たよと。来て、ずっと寝てたよ、という人がいて、どちらも参加者。どちらも参加している？参加していると思う方は？参加していないと思う方は？それはなぜですか。

参加者 友達に誘われた人は、誘われて、最終的に自分で行くと決めたのであれば、参加したということだと思うんですけど、その人が無理やり連れてこられたのであれば

ば、それは、参加したのではなくて、参加させられたことになると思うんですよ。だから2つの場合があると思います。なので、一応、参加していないに手を挙げました。能瀬 いかがですか。参加していないに手を挙げた方。

参加者 先ほどの方と同じ意見なんですけれども、友達に誘われたっていうことなんですけど、自分の意思がそこにあるかどうかというのが一番大事だと思うので、講義中に寝てるとか、そういうのを周りから見たら、完全にあの人はやる気ないんだなと。そういう印象を周りが受けた時点で、その人は参加していないと思います。

能瀬 ありがとうございます。やはり、何か、先ほどの話と共通するところがあると思うんですよ。「意識」という言葉と、「周りが判断する」という言葉がまた出てきたと思うんですけれども。ちよつとこの言葉、覚えておいてくださいね。意識という言葉と、周りが判断する、周りが何かの基準にのつとって判断するんでしょけれども、判断する、ということが参加に大きく関わっているような気がしてきましたが、何か、ちよつと違うんじゃないかっていう方、いらっしやいませんか？いいですか？なければ、このまま進めます。

今日は、皆さん、選挙に興味がある方がお集まりいただいているわけですよ。鹿児島でやった時は、自分は選挙に興味ないんだけど、友達に誘われたんで来ました、という方もいらっしやったんですが、そういう方が全然いてくださって構わないんですけれども、一応、選挙に興味がある方、なんですよね。なので、これからちょっと選挙、政治の話をしてみたいと思います。

先ほどの発表の中で、アイドルを投票所に招いて投票に来てもらうようにするっていうアイデアに対して、選挙に興味がないけど、適当に投票する人がいたらどうするんですか、と、そんな人が増えたらどうするんですか、という質問がありましたよね。じゃ逆に、選挙に興味があるけど投票できない、何かしら忙しくてとか、本当はその日、投票できるつもりで、事前に期日前投票をしなかったんだけど、その日、急に怪我して選挙できなかった、そういう方もいらっしやいますよね。そういった方々って、参加しているんでしょうか？まず、選挙に興味がないけど、適当に投票する人について考えてみますか。選挙に興味がないけど、適当に投票する人は選挙に参加している。どうでしょうか？

参加者 一応、投票に行っている時点で参加はしていると思います。ただ、何も考えてないというか、特に政治に興味はないので、よく考えて投票してないので、参加は、一応しているけど、意思はないという感じというか。

参加者 私は、さっきのアイドルの話は、若者に選挙に行ってもらいたいという目的のためだったと思うので、余り興味のない人が行くっていうことでも、その目的を達成された時点で、私は参加していると思います。それによって、数字的に、その人が1票入れたことによって投票率は確実に上がるわけですので、目的を一部達成していると思います。確かに、その結果のところについては、やっぱり心配する部分はあるのですけれども、とりあえず第一段階の目的は達成できているので、参加している人だということに感じます。

参加者 僕は形式的には一応、参加していると思います。投票所に行って、適当に、票を入れているとすれば、それは、確かに形的には誰かを選んでいると思うんですけども、実質的に自分の主義主張等を考えて、この人って思っていないので、もし、その候補者が自分と全く考えが違う人だったら、その投票は全く無意味に近いと思うの

で、適当に投票してしまうと、全く違う人を選んでしまいことになるかねないので、参加しないと僕は思っております。

参加者 今の方に質問ですが、普段投票している人は、全員がちゃんと考えて、この人がいいと思って投票しているのか、それとも、適当に入れている人もいるんでしょうか？多分、何も考えずに投票している人っていうのは結構いると思うんですよ。その人は参加してないんでしょうか？

参加者 うーん。難しいですね。多分、参加はしてないと思います。だけど、何気なく、今までも自分はこの党に入れてたから、とりあえず今回も入れておこうという人もいるので、そうなってくると、習慣的に入れているようになってしまっているのです。本当の意味で入れているという感じはしないと思います。やっぱり色々考えて投票している人が、本当に参加していると僕は思います。答えになってないかもしれませんが。選挙の啓発でも、まず投票ということで、投票行動を促すような啓発がやっぱり結構あるので、そんな風に投票行動を促しているということから考えたら、投票に來ているというので参加したということになると思うんですけれども。政治に関心が

なくて、適当に入れたら参加したことにならない、というのであれば、その選挙啓発自体を、政治に関心を持ちましょう、という言い方に変えないといけないと思うので、投票行動を促しているという意味では投票をした時点で参加はしているということになるんじゃないでしょうか。

参加者 さっきの意見と似たようなところですけども、やっぱり、一票の重みというところで、何も考えずに投票した1票と、すごい考えて、考え抜いて投票した1票というのは、やはり開票されたら同じ1票で、同じ重さになるので、やっぱり、選挙にはもちろん参加していると思うのですが、政治には参加していないような感じはしますけれども。

参加者 自分のため投票したということが、参加したか、参加してないかという問題なんです。選挙の投票ということは、実際に行動を起こすじゃないですか。というのは、周りから見れば、あの人は選挙に行ったんだと思われるわけじゃないですか。その1票が適当なのか、真剣に考えたのかというのは周りから見えないことじゃないですか。そうやって、誰から見ても同じ1票なんだって考えると、投票所に実際に行

って投票したという行動は、選挙に参加したという考えでいいんではないかなというふうに思います。

能瀬 先ほども出てましたけど、投票したということが周りが判断する基準になっている。だから、どちらも参加している、どちらも、というか、1票を投じていれば、参加している。じゃ、逆に、選挙に興味はあって、すごく考えて、応援している候補者もいて、普段から政治についてすごい友達としゃべってたりして、だけれども投票しなかった、こういった方はどうでしょうか？こういった方は、恐らく、皆さん投票には参加していないとおっしゃると思うんですが、そうじゃない方いらっしゃいます？

参加者 選挙には情勢があると思うんですよ。A党が躍進するだろうっていう、その結果がある程度見えている段階では、あえて、A党を支持していた場合に投票する必要はないだろうということ、投票しない人もいるでしょうし。逆にA党が躍進しているって知っていれば、B党を支持する人は今回は投票するよりも、レジャーとかで楽しもうという人もいると思うので。つまり、投票の行動はとってないんですけど、そ

ういう人も、広い意味で考えれば参加しているのかなと思います。

能瀬 それは何に参加している？

参加者 投票行動に参加している。参加していないことも1つの意思表示だと思うので、そういう意味では参加しているのかなと思います。

能瀬 はい。いろんな意見あると思うんですけど。私、鹿児島でやったときにも、すごい疑問だったんですけども、こういう、皆さんのような選挙にすごい興味があって、政治に、選挙に熱心な方々でも、何も書かないで投票する方っていますよね。この白紙で投票するっていうことはふさわしいと思う候補者が誰もいない、というのが、実際に投票行動を示さないのって、何が違うんですか？

参加者 私は公務員で、選挙事務の手伝いもしているんですけど、開票のときに、なんでこんな白票が多いのかということをおもうことがよくあるんですね。なんでこんな意味がないことをするのかと。でも、よく考えると、白票を入れるというのは、先ほど、周りから、あの人が投票行っただけや、政治に参加しとるなって思われるというのがあったと思うんですけど、行くことによって白票を入れるのと入れないのでは、周り

から、あの人が政治に参加しているのかという評価というか、判断が変わってくると思うんですね。考えて、考えて、行かないと、あの人は選挙にも行かんと思われるかもしれないけど、ただでも、書いたか、書いてないかは見えないので、白票を入れるということとは、この人は政権とか批判しとるけど、ちゃんと投票には行くんやなと思われるので、その辺は周りの評価、周りの判断が変わってくる部分かなと思います。**能瀬** ということは、選挙への参加は投票するという行動でしか見えないということですよ。ではまた話を進めます。今回のグリーンエイジミーティングの目的は、若年者層の投票率を上げる、選挙に興味を持ってもらうことだと思うので、そもそも若年者層に選挙へ興味を持ってもらうということはこういうことなのかっていうのを考えてみましょう。

今までの話の中で、先ほど、「選挙には参加しているけど、政治には参加していない」ということをおっしゃった方がいましたね。逆に、選挙には参加していないけれども、政治には参加しているとしたらですよ、皆さんが目指しているところっていうのは、どの層をどうすることなんですか？例えば、先ほどのアイドルにしか興味がなく

て、それに会いたいがために投票するっていうことが完全な悪だとしたら、それは投票には参加しているけど、政治には参加していない人は別に増えなくていいと思ってるのでしょうか？

参加者 そのアイドルに会いに来たけど、本来の選挙はどうでもいいという人が増えても僕はいいと思います。なんでかというところ、そういう人が余りに少なくて全然クローズアップされないようなら、仕方ないかなと思うんですけど、そういう人が増えてきて、こういう層が多いというのが見えてきたら、それはそれで、政治家が努力するきっかけになると思うんですよ。そういう人が増えることによって、さっき言われたように、票の結果が左右されるまでになってしまったら、政治家にとっては一大事なので、そういう層がクローズアップされるようになって、政治家が頑張る、そういう循環が生まれてくれれば、それはそれで僕はいいと思います。

参加者 先ほどの話で、そのアイドル目当てに投票に行ってもらって、で、それを機会に選挙にも参加してもらって、その次に、ちゃんと政治に参加してもらっているのは、いいと思うんですけど。多分、その間のハードルが高過ぎると思います。む

しろ、たぶん政治家の違いがわからないのだと僕は思うので、何かすごくわかりやすく解説するとか、政治家にもちよつと考えてもらって、こういうところが違う、という啓発してくれるようなことをやってくれれば、政治に参加してくれるようになってくるんだと僕は思うのです。とにかく、まずは投票から始めることが大切だと思いますね。

能瀬 他の方、どうですか。それは困るとか、いらつしゃいませんか。

選挙にも参加して、政治にも参加するのが1番というのは確かですね。で、1番だめなのは、選挙にも参加しないで政治にも参加しない、というのが1番困りますね。

参加者 選挙啓発活動をするのに、そこがすごく大事なところなんですけれども、やっぱり若年層に行ってもらおうと思うのは、今まで政治にも選挙にも参加したことがない人にどうやって来てもらって、最終的に両方に参加してもらおうかと考えるところで、行き方がよくわからないとか、今まで興味なかったから、よくわからないというのをクリアすることが第一歩でもいいかなと。

まず、そこで、選挙に参加するっていうのが第1条件で、その次に政治に参加する

というふうに、順を追っていくことになるので。やっぱり、まず若年層向けに何かをしようと思ったときには、選挙に参加してもらおうっていうのが、まず最初に考えていけないといけないことかなと思います。そこで行けば、次に政治に興味がわいてきて、参加したいと思う。そういう時に、次の段階の啓発が待っているかなと思います。

能瀬 反対の方っていらっしやいませんか？ 反対じゃなくてもいいですよ。何か意見を言いたくなった方。最後に一言しゃべっておきたいという方とか。

参加者 候補者が、例えば、なぜ年金とかそういう、若年層じゃなくて、高齢者に対しての政策ばかりを打ち上げているのかというのは、高齢者とかのほうが投票率が高くて、若年層が投票率が低いから、余り重視していないということがあると思うんですよ。ということは、若年層も投票率自体というのが上がっていけば、候補者であっても、若年層を重要視して、若者向けの政策を考えていくと思います。ということ

は、まず、選挙に行くという、投票率を上げるということを、若年層にしていけば、候補者も若年層に対して、若年層に関する政治を打ち上げていって、政治に関心を持たせるということになると思います。なので、順番的にはまずは選挙に行くことから、

そして、候補者に、政治に対して、影響を与えていってという順番なので、まずは若年層の投票率を上げるべきだと考えます。

参加者 投票率を上げたいということなんですけど、ちょっと今、僕、疑問に思っているのは、じゃあなんで若年層の投票率を上げたいのかという、その投票率を上げることによる、その目的というのは何なのかというのを1回確認してみたいです。

能瀬 いいことですね。若年者層の投票率を上げる目的。高くしなきゃいけないんですか。ということですね。その若者の投票率を上げる目的って何でしょうか？

参加者 私はちよつと意見が偏っているかもしれないんですけど、まずですね、若い人の平均年収とか見ると、私も子育て世代なんですけど、すごい低いんですよ。実は60代とか70代でもう退職している人のほうが年金とか何やらで収入が上回っているんですね。本当は年金をまだもらっていない若い人こそ、もっと子育てとかのために余裕があるようにしないといけないと思います。例えば、出生率とかもそうですし、あと、保育所とかっていうのは何十年もずっと言われているんですけど、なかなか整備されていないで、やっぱり、老人向けの施設とか年金とかのほうにいつちゃう、

というのは、よく思います。あともう1つ思うのは、さっきの彼が言われていたように、政治家の人はどうしても投票率の高い高齢者向けになっちゃうというのと、国債の問題で、やっぱり年とってたら、もう自分たちの世代はいいやと思ったら、先送りして国債発行しちゃったほうが楽。どうせ自分はもうすぐ死んじゃうし、というふうな感じになっちゃうと思うんですよ。そうじゃなくて、自分たちの使う分は自分たちで解決して、と思うんだったら、やっぱり若い人が入れないとツケを回されてしまうというかですね、そういうふうになるんじゃないかなあと単純に思うので、若い人が意見、持つてるぞ、というプレッシャーを与えないといけないんじゃないかなというのは思います。

能瀬 政治家の方々に若い人がプレッシャーを与えることが目的。他どうでしょうか？

参加者 今の発言にあったこととに似ていると思うんですけど、日本の未来を考えたときにそうじゃないかなと思いました。特に、高齢者というのは、そういうふうにな金をもらって、もう働かないので、その人たちからお金は入ってこないし、でも、そ

ういう人たちが投票に行くからということでは政治家たちは、そういうふうにならぬうちに優遇するような政策をとる。多分、今まではそれでよかったかもしれないが、経済は高度成長だとか、ずっとそういうのできたと思うんですけど、つまり、今は日本全体で歳出だけがどんどん増えている、高齢者に何かするお金だけがすごい増えていると思うんです。でも結局、それをやっていたら、今話しに出た国債が900兆円を超え、もう1000兆円みたいな感じで、日本も今、いろいろ破綻している部分もありますし、日本もそろそろ危ないんじゃないかと本当に思うんです。そういう点で考えたときに、若者の投票率が上がれば、つまり、これから働く人たちにとっての政策っていうのが打たれば、少しでも、日本の未来が少しは明るくなるのかなと思つたので、そういう意味で、やっぱり、投票率を上げることっていうのが、いい葉じゃないかなというのをすごく思います。

能瀬 日本の未来を明るくするため、はい。

参加者 基本的には同じことなんです、なぜ、若者の投票率がいいかという問いでは、今の若者の意見って結構無視されていると思うんですね、政治家の中で。なぜか

っていうと、子ども手当って、よくテレビで話題に出てきてますけど、なんで子ども手当だけ焦点が当たったのか。あれはお父さん、お母さんに投票してもらったためですね。そしたら、若者としたら就職手当を出してくれ、という話ですよね。特に今日も大学生の方たくさんみえてますけど、今の時代、なかなか、移動とかもあって大変だと思うので、そういう制度から就職手当みたいなものがあった方がいいと思うんですけど、そういうの一向にうたわれない。それは若者の票が得られないから。つまり、自分に投票してもらえないから、そうすると当選できないから。そういうことになってくると思うんですね。例えば30年前がどうだったかということはよくわかんないんですけど、仮に若者の投票率が低くても、当時は若者のほうが多くて、高齢者が少ないという時代で、経済もどんどん成長していくときだから、少々放っておいてもある程度の数は投票してくれるだろうし、ある程度、待たせとけばいいや、という時代だったかなと思うんです。でも、今はそういう状況ではないので、若者の投票率、投票の総数を上げていく必要があるのかなと思います。

能瀬 その他、御意見ないですか。3人に言っていたきましたけど、どうでしょう。

参加者 僕は投票率を上げる目的は、やっぱり、皆さんと似ているようなことなんですけど、若者の意見というのが反映されなといけないと思うので、投票率が低いからとか、そういう表向きのことじゃなくて、若者が意見を出した上で、やっぱり投票しないと意味がないんじゃないかなというふうに考えます。衆議院選挙のときに一緒に最高裁判所の国民審査がありますよね。あれも名簿の一番右の人が一番不信任票が多いんで、なんかそういうふうに適当につけるんじゃないかな、意味がないんじゃないかなというのを思うんですよ。だから、さっきのアイドルで、っていうのについても、衆議院選挙のほうで投票することが目的で、国民審査は副産物みたいな感じになっているのと同じで、アイドルのほうが目的で、その普通の選挙が副産物という形じゃ、やっぱり僕は意味ないというふうに考えているので、それだったら、やっぱりだめなのかなというのは、ちょっと思いました。

参加者 国民投票が副産物とか、そういうアイドルのほうが上になっていたらいけないんじゃないかというのは、確かにそれはそうで、なんでそれがいけないかというと、そういうのによって、実際の選挙がないがしろにされている、という部分がクローズ

アップされないからだと思うんです。例えば、白票が何票入ったとか、実際、そういうのがどれだけあるのかというのは正直わからないですよね。誰が何票としか出ないじゃないですか。だから、ちよつとこれは行政職員の方にお願ひみたいな感じになるかと思うんですけど、そういうところもつと、表に出してほしいなあと思っていて、実際、法律の関係とか、そういうので、そういうのは出せないのかどうか、ちよつと僕はわかんないんですけれども、そういう意思が明確じゃなくて投票した方とか、無効とか白票とかそういうのがどれだけあるかというのを、ぜひ、出してみていただけるといいのかなと思います。

能瀬 はい。ということ、議論が盛り上がってきたところでお時間です。ひよつとしたら中には、早く終わってくれよ、という方もいらつしゃれば、まだ話し足りないよ、という方もいらつしゃると思いますが、哲学カフェというのは、本当に毎回そうなんですけれども、そこではつきりした結論を出すものではないので、空腹感とか、まだ足りないぞ、というモヤモヤ感のほうがすごく多いんですね。で、ちよつと最後、まとめに入らせていただきたいと思いますけど。皆さん、哲学カフェという

のを体験してみても、いかがでしたでしょうか。

実は、冒頭で急に目をつぶっていたいて、鮫島がなんか文章を読みましたよね。あれはですね、三重で開催しているいせ哲学カフェのホームページから拝借したものですよ。私、あれがすごい好きで、なんで好きかっていうと、今みたいな結論は出ないんですけれども、今、皆さんやってみてわかったと思うんですけれども、これだけ、選挙に興味があるという方がそろって、集まって、皆さん積極的に投票に行ってくださいという活動をされていて、にもかかわらず、みんなやっぱり、何かしら考えていることが違いますよね。皆さん、同じような意識を高く持つていらつしゃって、そういった活動をしているのに、やっぱり人間ですから、それぞれ思いは違うと。今日のこういう対話を通して、そういった皆さん1人1人の意見が違う、ということを実感したのではないかと。満足感はわかりませんが、そういった気持ちは持っていただけではないかと思えます。

で、今日の哲学カフェを終えてみて、皆さん、いろんな考えが頭をめぐっていることだと思います。対話を通じて考え抜いてみるのが、私たちが生きていく中、生き

ていく生活の中、すべてで、自分自身と、そして、自分が生きている世界を見つめ直す1つのきっかけになるんじゃないかという気がします。

ですので、また、集まって、こういった会を設けるだとか、もしくは、今日のお気持ちそのまま持ち帰っていただいて、また、友達とか仲間とか、もしくは家族と、ぜひ、テーマは違ってでもいいので、今日の哲学カフェの続き、哲学カフェのようなことをしてみただけだと思います。

本当にどこでも、どんなところでも、どこでも、御飯食べながらも、特に、鹿児島哲学カフェはお酒がないとやらないというルールがあるので、お酒を飲みながらも、できると思いますので、是非いろんな場所で、何か答えが出なくても考える時間を持つていただければと思います。

今日は皆さん、初めてにもかかわらず、積極的に発言していただいたおかげ、もしくは発言はしていただかなくても、積極的に私のほうを見てくださっていたおかげで、無事、哲学カフェの時間を終えることができました。皆さん、本当にありがとうございます。それでは、時間となりましたので、この哲学カフェの時間を終わりにした

と思います。皆さん、どうもありがとうございました。（拍手）

編集・発行：財団法人明るい選挙推進協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町13-3
ラウンドクロス一番町7階
<http://www.akaruisenkya.or.jp/>